

2025 年度 ボランティアセンター 年間活動報告書



フェリス女学院大学

はじめに

ボランティアセンター長 富樫 剛

4月を迎え、2026年度がはじまりました。ロシアによるウクライナ侵攻開始から4年、イスラエルとアメリカによるイラン攻撃がはじまって3か月、国内外の世界は政治的・経済的にとても不安定で、まったく先の読めない状況が続いています。同時に、フィギュアスケートやカーリングの世界選手権が成功のうちに終わるなど、不穏なことなどまるでないような報道も同時に流れてきます。いつの時代でも、どこの世界でも、このように幸不幸・プラスマイナスが交錯するなかで人は生きてきたのかな、とぼんやり考えてしまいます。また、こんなことを考えていられるうちは幸せなのかな、と思ったりします。

学生たちも同様でしょう。先の読めない世界のなか、卒業後の進路について考えれば不安を感じるはずですし、そんな不安を忘れるほど楽しいこと・集中できることも、日々のくらしのなか少なからずあると思います。正課の学業であれ、部・サークル・学友会・大学祭のような課外活動であれ、あるいは友人関係であれ、大学がそのような充実の場のひとつとなっていれば幸いです。

ボランティアセンターの活動は、学生生活の充実と同時に、あるいはそれ以上に社会貢献を明確な目的とする点で、他とは大きく異なるように思います。(フェリスの部・サークルの多くが地域社会のための活動をしているというのも事実ですが。)社会のなか生じている大小さまざまな困難の解消のために主体的に行動するということは、生活・仕事上のささやかな親切を除けば、率直に言って私がしてこなかったこと・私にはできないことであり、そこに楽しみや喜びを見つけれられる学生たちは、私にはとてもまぶしく見えます。

そんな学生たちの2025年度の活動をこの冊子にてご紹介します。ボランティアをおこなった理由、そこで経験したこと、その成果や今後の課題と考えることなど、学生たち自身の率直な言葉で語られています。ご高覧いただけましたら、とてもうれしく思います。また、ボランティア活動に関心のある学生がいましたら、ぜひ励ましていただけますよう、よろしくお願いいたします。

2026年4月

2025 年度ボランティアセンター年間活動報告書 目次

はじめに

センター長

富樫 剛

ボランティアセンターの目的と事業

- | | |
|----------------------|---|
| 1. 中期計画（21-25PLAN） | 1 |
| 2. 2025 年度の活動をふりかえって | 2 |
| 3. ボランティア活動科目履修 | 3 |
| 4. その他 | 4 |

活動報告

- | | |
|--|----|
| 1. 活動一覧 | 5 |
| 2. センターの利用状況 | 8 |
| 1) 利用学生数 | |
| 2) 情報提供～メール登録システム | |
| 3) 学外からのボランティア情報 | |
| 3. 活動紹介 | 10 |
| 1) 新入生向けボランティア説明会 | |
| 2) ボランチ開催 | |
| 3) その他 | |
| 4) CLA 棟共同企画～D & I (Diversity and Inclusion) Zone～ | |
| 5) 使用済み切手・書き損じはがきの収集と寄付 | |
| 6) ペットボトルキャップの回収 | |
| 7) 寿町バザーへの支援 | |
| 4. 学生活動支援 | 23 |
| 1) ボランティア活動補助費の支給 | |

学生ボランティアグループの活動

- | | |
|-----------------------------------|----|
| 1. 参加学生 | 24 |
| 2. 演奏ボランティア | 25 |
| 1) ポピンズナーサリースクール芝浦ベイ | |
| 2) NPO 法人四季の会 | |
| 3) だんだんの樹ミニ演奏会 | |
| 4) めぐみ幼稚園クリスマス祝会 | |
| 5) 不老町地域ケアプラザ 日ノ出川公園クリスマスイルミネーション | |
| 3. アンネのバラ園芸ボランティア | 29 |
| 1) ポプリ作りワークショップ | |
| 2) アンネのバラ記念礼拝 | |
| 3) 植樹式 | |
| 4) アンネのバラフォトコンテスト写真展 | |
| 5) 2025 年度研修会 | |

4．就労支援事業所販売ボランティア			38
5．ボランティアサークル活動			39
6．ボラカツポイント制度			41
NPO インターンシッププログラム			42
 国際機関実務体験プログラム			 43
 学習支援ボランティア			 45
 学生による活動報告			 47
NPO 法人アクションポート横浜	国際社会学科 1 年		
NPO 法人ピッピ・親子サポートネット	文化表現学科 1 年		
NPO 法人ピッピ・親子サポートネット	文化表現学科 1 年		
片倉うさぎ山プレイパークでのインターンを終えて	コミュニケーション学科 3 年		
横浜市国際交流協会 (YOKE) (春期)	国際社会学科 1 年		
森ノオトでのインターン活動について	コミュニケーション学科 3 年		
ボルネオ島 インターン留学	国際交流専攻 1 年		
教育活動の現場から学ぶ国際協力の現状と展望	国際社会学科 1 年		
ポピンズナーサリースクール芝浦ベイ	音楽芸術学科 3 年		
「てらこやちば」活動報告	音楽芸術学科 2 年		
湘南台小学校国際教室	国際交流学科 2 年		
舞岡公園での田んぼ、畑、雑木林等の農体験	音楽芸術学科 2 年		
高齢者向けスマホボランティア	音楽芸術学科 2 年		
よこはま教育実践ボランティア	英語英米文学科 2 年		
 ボランティアセンター資料			 85
ボランティアセンター規程			
ボランティアセンター運営委員会規程			
ボランティアセンター運営方針			
 2025 年度を振り返って	コーディネーター	上條 直美	90

表紙写真・裏表紙写真：アンネのバラ

・ボランティアセンターの目的と事業

1. 中期計画（21-25PLAN）

ボランティアセンターは、大学中期計画「21 - 25PLAN」の以下の3つの中期目標に基づいて事業計画を策定し、実施しています。

中期計画名称	事業名	2025年度の成果
「For Others」の理念に基づく人材育成事業の充実	1. 国内外の課題解決を図る人材育成（学生スタッフ・コーディネーターの育成） 2. NPO 等との地域の課題解決への取り組み 3. 広報・啓発活動の更なる強化/認知度向上と行動の促進・拡充 4. ボランティアセンター活動報告書の作成	1. ボランティアセンターに関わりの深い学生を対象に日帰り研修会を実施した。また、2026年度からスタートする One-Day ボランティアプログラムに学生コーディネーターを置き、一緒にプログラム運営を行うことを通じて人材育成することを計画。 2. NPO インターンシップ（NPO 法人アクションポート横浜）に5名の学生が参加。泉区障害者福祉自立支援協議会による学内販売への協力。 3. ボランティア情報の発信頻度を1日1回に引き上げ、より多くの情報を提供した。コロナ後、外部団体からの募集情報が増加したため、情報精査と発信に努めた。 4. 学生の活動報告レポートの掲載を通じて、学生の活動報告の場と学びを深める場としての活動報告書本来の目的を強化した。
社会的課題への取り組み機会の拡充	1. 地域・地方自治体・市民社会との連携 2. 被災地支援の拡充 3. 他大学のボランティアセンターとのネットワークの拡充、プロジェクトの実施 4. 学生によるボランティアセンター及びボランティアに関する広報の拡充 5. SDGs 及び ESD に関するプロジェクトの拡充	1. 泉区社会福祉協議会「泉ふれあい助成金」「福祉の泉助成金」配分審査委員会委員を担った。2024年度に実施した地域ケアプラザや社協のコーディネーター研修会をきっかけに地域からのボランティア募集が増加し、学生と地域ケアプラザの協働企画が実現した。 2. 被災地支援としての具体的な活動展開には至っていない。 3. 東京ボランティア・市民活動センターが主催する関東地区大学ボランティアセンターネットワーク「ほんわかねっと」の研究会に参加。また同団体主催の全国大学ボランティアセンター調査（2024年度～2025年度）に参画。全国ボランティアコーディネーター協会主催全国研究集会に学生3名と参加し、ネットワークを広げた。 4. チラシの作成等、SNSの発信に協力。

	6.国際協力・地球規模の課題への取り組み	5.外部団体からの SDGs 及び ESD に関する情報を積極的に一般学生に向けて発信、提供した。 6.国際協力・地球規模の課題に関する情報を積極的に一般学生に向けて発信、提供した。
意思決定を担う 女性への人材育成	1.女性のエンパワーメントの推進	1.ジェンダーセンターと共催で公開講演会などを実施した。

2 . 2025 年度の活動をふりかえって「社会連携・地域連携」

2005 年中教審、2018 年の中教審において、高等教育機関による社会貢献、社会連携・地域連携を目指す生涯教育（学習）社会教育の推進が強化され、社会連携センターを設置する大学が増えました。

ボランティアセンターは、「市民の自発的意思」と「社会課題への取り組み」を柱としており、それらの実現のためには社会連携・地域連携の活動は必須です。一方で、近年の市民社会の変化、多様化の中で、運動としての市民活動が以前ほど共感を得ることができず、その在り方が問い直されつつあります。産官学連携や企業が社会的貢献を重視する傾向の中で、今一度、「ボランティア活動」の役割とその価値を見直そうという動きが全国の大学ボランティアセンターの間でも見受けられます。

2025 年度は、学生が気軽に参加できるフックとなるプログラムを増やし、それが多くの学生を引き付けるきっかけとなりました。

以下、中期計画（21 - 25PLAN）に沿って 2025 年度の活動をふりかえります。

1) 「For Others」の理念に基づく人材育成事業の充実：「参加」から「参画」へ

2024 年度と同様、長期継続のボランティアより単発のイベント型への参加が好まれる傾向が進んでいる。「参加」の段階から「参画」へ進めるにはどうしたらよいかを模索する 1 年となりました。

演奏ボランティアの活動には学生自身のコーディネーションが必須なので、年間を通して学生コーディネーターが機能してくれたことによって、多くの演奏ボランティア活動の依頼を受けることができました。

NPO インターンシッププログラムは、夏休みの 80 時間、集中して 1 つの団体でボランティア活動を行うので、受け入れ団体のスタッフの方々や利用者とのコミュニケーションを通して多くを学ぶことができ、「参画」とは何かを具体的に経験し、主体的な動きを見せてくれるようになります。主に NPO インターンシップ経験学生を活かす形で、新しく One-Day ボランティアという一日ボランティア体験のプログラムを作りました。そこでは参加学生とボランティア受け入れ団体の間のコーディネーションを、学生コーディネーターが行うことが期待されています。

また、ボランティアサークル制度をスタートさせ、3 団体が設立。うち 2 団体が継続的に活

・ボランティアセンターの目的と事業

動をしました。自分のやりたいことをゼロから立ち上げる経験は、主体性を育むうえでもっともよい方法で、ボランティアセンターは側面支援を行うという本来の姿がそこに実現しました。

情報提供メールシステムでのボランティア情報発信は、年間 150 件、情報を見て活動に参加する学生も増えているという手ごたえがあります。本システムでは、学生はボランティアセンターを介する必要がないため、学生の参加状況、活動状況を把握することはできませんが、次年度は可能な範囲で活動に参加した学生の情報を集め、その経験知を他の学生へフィードバックできればと考えています。

2) 社会的課題への取り組み機会の拡充：地域との連携

今年度は、2024 年度にアクションポート横浜主催の会議（地域ケアプラザのコーディネーターとの交流）などで知り合った地域の組織・団体と継続的なコミュニケーションをとる機会に恵まれました。

スマホ教室の実施（2026 年 2 月 23 日）

新橋地域ケアプラザとフェリス近隣で営業をしている A.cafe からの呼びかけで、学生による「高齢者スマホ教室」を開催した。11 名ほどの参加で良い交流の場となった。

泉区障害福祉自立支援協議会への協力（年間）

同協議会が 2024 年より大学内で定期的に販売活動を始めたため、学生の参加機会を作ることを提案、毎回の販売に 2、3 名の学生ボランティアが参加し、販売設置のお手伝いをしたり、利用者の方々との交流を通して障害への理解を深めるよい機会となった。

3. ボランティア活動科目履修

2025 年度、履修登録を行った学生と活動内容は以下の通りです。NPO インターンシッププログラムでの活動時間と履修に必要な活動時間が合致しているため、プログラム参加者からの履修登録が増えました。

科目名	履修者	前期	後期	活動内容
ボランティア活動(長期) (270 時間)	音楽芸術学科 2 年		1 名	てらこやちば
ボランティア活動(中期) (90 時間)	国際交流学科 2 年	1 名		Act for Child
	音楽芸術学科 3 年	1 名		NPO 法人アークシップ
	国際交流学科 4 年	1 名		NPO 法人リロード
	文化表現学科 1 年		2 名	NPO 法人ピッピ・親子サポートネット
	国際社会学科 1 年		1 名	NPO 法人アクションポート横浜
	音楽芸術学科 2 年		1 名	舞岡やとひと未来

．ボランティアセンターの目的と事業

ボランティア活動(短期) (45 時間)	国際交流学科 2 年		1 名	NPO 法人リロード
	国際交流学科 2 年		1 名	さくらザウルス
	国際社会学科 1 年		1 名	ICYE ジャパン カンボジア ワークキャンプ

4．その他

学内組織・ボランティア系団体との連携

- ・キリスト教センターの協力を得てアンネのバラ礼拝の実施
- ・キリスト教センター、国際センターと共同で、アジア学院スタディツアーの実施
- ・ジェンダースタディーズセンターとの共催で公開講演会の実施

学外組織との連携

- NPO インターンシップ系ボランティア (2009 年度開始事業)
- 国際機関実務体験プログラム (2005 年度開始事業)
- 泉区社会福祉協議会への協力
- 日本ボランティアコーディネーター協会 (JVCA) 会員
- 関東地区大学ボランティアセンターネットワーク (ほんわかねっと) への参加
- 東京ボランティア・市民活動センター全国大学ボランティアセンター調査への参加

・活動報告

・2025 年度活動報告

1 . 活動一覧

4 月 2 日 、 3 日	ボラセン・バリフリ・Gem 合同説明会（対面）	参加者 100 名
4 月 21 日 ~ 24 日	ボランチ開催（新入生勧誘期間）	24 名 メンバー11 名
4 月 28 日 ~ 29 日	ボランティア活動科目履修相談	9 名
5 月 12 日	就労支援事業所販売ボランティア（社会福祉法人ぴぐれっと）	2 名
5 月 15 日	NPO インターンシップ説明会（オンライン）	3 名
5 月 16 日	就労支援事業所販売ボランティア（社会福祉法人あゆみ会 おれんじ村）	1 名
5 月 22 日	NPO インターンシップ説明会（対面）	
5 月 23 日	就労支援事業所販売ボランティア（NPO 法人なかだ）	-
5 月 26 日	就労支援事業所販売ボランティア(NPO 法人いずみの輪 和輪工房) （社会福祉法人いずみ苗場の会 つぼみの家）	1 名
5 月 28 日 ~ 30 日	国際機関実務体験プログラム（夏期）説明会	
5 月 30 日	アンネのバラフォトコンテスト募集	9 名
6 月 6 日	アジア学院スタディツアー 参加者説明会	
6 月 6 日	就労支援事業所販売ボランティア（社会福祉法人あゆみ会 おれんじ村）	1 名
6 月 13 日	就労支援事業所販売ボランティア（NPO 法人なかだ）	3 名
6 月 14 日 ~ 15 日	アジア学院スタディツアー(キリスト教センター、国際センターと共同)	8 名
6 月 16 日	就労支援事業所販売ボランティア（社会福祉法人ぴぐれっと）	2 名
6 月 18 日	アンネのバラ記念礼拝	4 名 メンバー4 名
6 月 26 日	ポプリ作りワークショップ	7 名 メンバー4 名
6 月 30 日	就労支援事業所販売ボランティア(NPO 法人いずみの輪 和輪工房) （社会福祉法人いずみ苗場の会 つぼみの家）	3 名
7 月 8 日	澤田ゼミ来訪	5 名
7 月 10 日	就労支援事業所販売ボランティア（社会福祉法人ぴぐれっと）	-
7 月 14 日	アジア学院礼拝	2 名
7 月 16 日	就労支援事業所販売ボランティア（社会福祉法人あゆみ会 おれんじ村）	1 名

・活動報告

7月17日	就労支援事業所販売ボランティア（NPO 法人なかだ）	-
7月19日	映画上映会「私が描きたいこと」&トークショー （CLA 棟共同企画 ジェンダースタディーズセンターへ協力）	
7月21日	NPO インターン 2025 交流会	
7月24日	就労支援事業所販売ボランティア（社会福祉法人いずみ苗場の会 つぼみの家）	-
8月21日	アンネのバラチーム 2025 年度研修会	学生+先生 6 名
9月4日	ポピンズナーサリースクール芝浦ベイで演奏ボランティア	5 名
9月26日	高橋京子ゼミ来訪	10 名
9月28日	NPO 法人四季の会センター 芽生え地域交流会で演奏ボランティア	2 名
10月10日	アンネのバラ 枯れた木の撤去作業	3 名
10月14日	ジェンダースタディーズセンター共催 公開授業	
10月16日	就労支援事業所販売ボランティア（NPO 法人なかだ）	3 名
10月17日	日本赤十字 献血バス	11 名
10月21日	就労支援事業所販売ボランティア（社会福祉法人いずみ苗場の会 つぼみの家）	2 名
10月24日	駅前マルシェ	2 名
10月25日	NPO 短期インターンシップ報告会	
10月29日	就労支援事業所販売ボランティア（社会福祉法人あゆみ会 おれん じ村）	1 名
10月30日	就労支援事業所販売ボランティア(NPO 法人いずみの輪 和輪工房)	1 名
11月6日、10日	就労支援事業所販売ボランティア 交流会、説明会	2 名、9 名
11月12日	就労支援事業所販売ボランティア（社会福祉法人いずみ苗場の会 つぼみの家）	2 名
11月14日	アンネのバラ植樹記念礼拝、植樹式（アンネバラ 5 本植樹）	6 名
11月17日	澤田ゼミ来訪	10 名
11月18日	緑園学園職場体験受入れ（中学生 6 名） 就労支援事業所販売ボランティア（NPO 法人なかだ）	3 名
11月27日	就労支援事業所販売ボランティア(NPO 法人いずみの輪 和輪工房)	3 名
11月29日	だんだんの樹 ミニ演奏会	演奏 4 名 動画 1 名
12月4日	NPO インターンシップ学内報告会	3 名
12月6日	カラバオの会 見学	1 名

・活動報告

12月10日	フュージョンコムかながわ来訪	訪問カレッジ 生+先生5名
12月12日	ボラセン学生ボランティア交流会（クリスマス会）	11名
12月13日	演奏ボランティア めぐみ幼稚園クリスマス祝会	5名
12月14日	東京ボランティア市民活動センター研修会	2名
12月16日	就労支援事業所販売ボランティア（NPO 法人なかだ）	3名
12月19日	演奏ボランティア 不老町地域ケアプラザ 日ノ出川公園クリスマスイルミネーション	4名
2月1日	演奏ボランティア NPO 法人四季の会シンポジウム	5名
2月5日	フェリス女学院高校生 探求学習インタビュー	高校生4名
2月13日	ピッピ 夕暮れ食堂 見学	1名
2月21日 ~ 22日	全国ボランティアコーディネーター研究集会@至学館大学	3名
2月23日	フェリス女学院×A.cafe×新橋地域ケアプラザ スマホ教室	4名
2月23日	NPO 長期インターンシップ報告会	
2月27日	第39回泉区社会福祉大会（司会ボランティア）	2名

2. センターの利用状況

1) 利用学生数

4～8月は初回来訪者実数、9～3月は延べ人数とカウント方法を変えています。今後は延べ人数とし、稼働状況をより反映させた形にします。

月	初回来訪者数	月	延べ人数
4月	67	9月	42
5月	82	10月	72
6月	82	11月	80
7月	59	12月	53
8月	4	1月	62
		2月	12
		3月	5
上期	294名	合計	620名

ボランティアセンター開室時間 月～金 10時～17時

2) 情報提供～メール登録システム

2024年度登録学生数	約240名
2025年度登録学生数	約277名

情報発信数：153件（原則、1日1通ペースで毎日18:00に配信）

3) 学外からのボランティア情報

【学外団体からのボランティア募集や勉強会・セミナー参加募集の状況】

募集主体の種別（123団体）

NPO法人	56	社団法人	2	自立支援協議会	0
公益財団法人	12	環境省	2	青年会議所	0
任意団体	6	横浜市教育委員会	1	一般財団法人	0
横浜市国際交流協会	5	企業	1	あーすぷらざ	0
社会福祉法人	4	独立行政法人(JICA)	1	かながわ国際交流財団	0
行政(神奈川県)	4	小学校	1	国連 UNHCR	0
社会福祉協議会	3	中学校	1	行政（横浜市）	0
地域ケアプラザ	3	大学ボランティアセンター	1	その他	16
行政(区民活動センター)	3	行政（区役所）	1		

募集主体の活動分野

分野	件数
講座・セミナー	26
祭り・イベント	25
子ども・青少年活動	19
教育	12
福祉（障がい者、高齢者、その他）	11
まちづくり	10
国際交流	8
国際協力	7
環境	6
外国人支援	3
その他	3
文化・芸術	2
スポーツ	2
災害支援	2
医療・保健	0
人権	0

情報提供メールでボランティア活動に参加する場合は、学生が直接主催団体に連絡するシステムなので、すべての活動についてボランティアセンターで把握しているわけではない。学生や主催団体からいただいた情報では、2025 年度、下記の団体・活動に学生が参加していることがわかっている。

- ・一般社団法人かけはし
- ・緑園学園地域学校協働本部
- ・だんだんの樹
- ・こどもにほんごきょうしつ@なか国際交流ラウンジ
- ・保土ヶ谷国際交流ラウンジ
- ・ポピンズナーサリースクール芝浦ベイ
- ・泉区社会福祉協議会
- ・新橋地域ケアプラザ
- ・舞岡公園
- ・泉区役所
- ・とつか区民活動センター
- ・緑園マルシェ

3．活動紹介

1) 新入生向けボランティア説明会（ボラセン・バリフリ・Gem 合同説明会）

実施日時	4月2日（水）15時20分～16時 4月3日（木）11時10分～11時50分
場所	キダーホール 2403 教室
実施目的	新入生向けにボランティアセンターおよび バリアフリー推進室、ジェンダースタディ ーズセンターの活動紹介
参加者	67 名 33 名 計 100 名



今年はバリアフリー推進室とジェンダースタディーズセンターとの合同で新入生向け説明会を実施しました。

2) ボランチ開催

新入生新歓期間である 4 月 21 日（月）～29 日（火）の昼休みに、ボランチを開催しました。延べ約 34 名の学生の訪問や問い合わせがあり、ボラセンでの活動やボランティアについて紹介しました。

日付	テーマ
4月21日（月）	アンネのバラの活動
4月22日（火）	演奏ボランティア
4月23日（水）	NPO インターンシップ参加学生
4月24日（木）	学習支援ボランティア
4月28日（月） ～29日（火）	ボランティア活動科目履修説明

3) その他

< ボランティア活動科目履修相談 >

実施日時	4月28日(月)～29日(火)12時20分～12時50分
場所	ボランティアセンター
実施目的	ボランティア活動科目の履修登録の流れについての説明
参加者	9名

< 国際機関実務体験プログラム募集案内 >

実施日時	5月28日(水)～30日(金)12時20分～12時50分
場所	オンライン (Zoom)
実施目的	横浜市国際交流協会によるプログラム説明会

< 空先生とポプリ作りワークショップ >

実施日時	6月26日(木)12時20分～13時
場所	図書館2階イベントプラットフォーム
実施目的	空先生とのポプリ作りワークショップを行いました。一般学生9名の応募があり、ボラセン学生スタッフと合わせて11名の参加となりました。当日は3グループに分かれ、まずはそれぞれ自己紹介をしました。どのグループも楽しくおしゃべりをしながら作業し、57個のポプリが完成しました。完成したポプリは、アンネのバラ記念礼拝でお配りしたほか、日ごろの感謝を込めて、清掃スタッフの皆さんや学食の皆さんへプレゼントしました。
参加者	空 由佳子先生 (国際社会学科) 参加者：アンネバラ学生スタッフ4名、一般学生7名 (計11名)

【感想】(一部抜粋)

- ・バラの意見交換などができ、とても楽しかったです。
- ・参加学生は初対面でしたが、和気あいあいと楽しく作業ができ、あっという間の時間でした。
- ・初めての参加、とても素敵な時間だった。
- ・アンネのバラということで、メッセージ性もあり、この素晴らしい活動をより多くの人に知ってもらいたいです。



・活動報告

< 澤田先生ゼミ来訪 >

実施日時	7月8日(火)13時10分～14時
場所	ボランティアセンター
実施目的	センターの見学、活動内容のご説明
参加者	澤田 佳世先生(心理コミュニケーション学科) 参加者：ゼミ学生4名

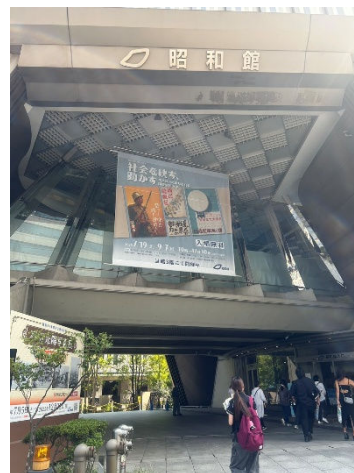
実施日時	11月17日(月)14時50分～15時30分
場所	ボランティアセンター
実施目的	センターの見学、活動内容のご説明
参加者	澤田 佳世先生(心理コミュニケーション学科) 参加者：ゼミ学生9名

< アンネのバラチーム 2025 年度研修会 >

実施日時	8月21日(木)10時00分～18時00分
場所	靖国神社遊就館、昭和館
実施目的	戦後80年に平和を考える
参加者	富樫センター長、上條コーディネーター、職員1名 アンネバラ学生スタッフ5名



靖国神社



昭和館

・活動報告

< 高橋先生ゼミ来訪 >

実施日時	9月26日(金) 15時50分～16時20分
場所	ボランティアセンター
実施目的	センターの見学、活動内容のご説明
参加者	高橋 京子先生(文化表現学科) 参加者：ゼミ学生9名

< 日本赤十字献血バス >

実施日時	10月17日(金)
場所	緑園キャンパス 駐車場
主催	日本赤十字社 神奈川県赤十字献血センター
参加者	10名

緑園キャンパスに献血バスが来校しました。ボランティアに10名の学生が参加しました。お昼休みや休み時間にチラシの配布を行い、その結果沢山の申し込みがありました。学生・教職員合わせて受付数63名、献血数48名の方が献血にご協力くださいました。



< 駅前マルシェ >

実施日時	10月24日(金)
場所	緑園都市駅 構内
内容	販売補助、福祉施設の方との交流
参加者	2名



・活動報告

< 緑園学園 職場体験 >

実施日時	11月18日(火)
場所	ボランティアセンター
実施目的	職場体験、センターの見学、学生との交流
参加者	4名

緑園学園の中学生が6名、来校しました。

職場体験は、働く体験を通して将来の生き方について考えることを目的とされています。
ボランティアセンター職員の仕事(ペットボトルキャップの回収や、就労支援事業所販売など)を体験し、大学生ボランティアによるキャンパスツアーやすごろくゲームなどの交流を行いました。最後は振り返りを行い、ボランティアとのつながりを持ち続けていきたいという願いを込めて、「ボランティアセンターパートナーシップ証明書」をお渡ししました。

【中学生感想】 一部抜粋

- ・知的障がいをもった方のボランティアをしたことは、今までやったことがなかったから印象に残った。
- ・人とのつながりが大切。誰かのためになっている=いいイメージになった。
- ・普段あまり意識することのなかったボランティアが意外と身近なものだなと思った。
- ・ボランティアってカッコイイ！



・活動報告

<全国ボランティアコーディネーター研究集会(JVCC)>

実施日時	2月21日(土)～22日(日)
場所	至学館大学(愛知県大府市)
実施目的	市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会
参加者	上條コーディネーター 参加者：学生3名

【学生の感想】

・国際交流学科 3年

全国ボランティアコーディネーター研究集会(JVCC)に参加させていただいて、非常に貴重な体験を多く得ることができました。まずは、幅広い色々な分野のコーディネーターさんたちとコミュニケーションが取れました。その方たちの貴重なお話や経験を書かせていただき、たくさん勉強になりました。また、コーディネーターたちの中で若者の方たちもいらっしゃって、コーディネーターをやるうえで、失敗した経験やそれをどう言う風に乗り越えるのかなども聞く機会がありました。さらに、今後のボランティア活動はどうなるべきかについても非常に大きな課題として自分たちの意見を言う上で、他の方たちの意見も聞かせていただきました。とても、良い体験になりました。ありがとうございました。

・国際社会学科 1年

1日目は外国人支援に関するもの、2日目はボランティアコーディネーターについての分科会に参加しました。私は地域の外国にルーツがある子供たちに日本語を教える活動をしています。その際、子供たちがなかなか勉強に集中できず遊びばかりになってしまうことが悩みでした。悩みを分科会に参加された皆さんに共有したところ、足かけ教材というのがあることを知りました。子供たちの興味関心のある分野に勉強を繋げ、楽しく学ぶようにする工夫が必要であると学びました。今後も子供たちの人生をさらに豊かにする学びを提供していきたいです。

2日目の分科会では、ボランティアコーディネーターがどのような仕事なのか、またどのようなことに悩んでいるのかを学ぶことができました。ボランティアについて違った視点から見ることができたので、とても勉強になりました。ボランティアに関わる様々な社会人の方にお会いできたことも、自分にとって大きな刺激になりました。今回参加できた貴重な機会を、大学の学びにも活かしていきたいと思います。

・国際交流学科 3年

私が参加した分科会は、2月21日(土)の「外国人は、支援される側？する側？みんなでボランティア！～壁を取り払いともに支えあう社会を目指して～」と、2月22日(日)の「新たな『参加』と『つながり』をコーディネート～図書館を拠点とした連携の可能性を探る～」です。私がこれらの分科会を選んだ理由は、今後のボランティア活動の計画を考えることに加え、自分の将来や卒業論文のテーマと関わりが深い内容だと感じたからです。

・活動報告

JVCC2026 は学生同士の集まりではなく、実際にボランティアコーディネーターとして現場で活動している方々が参加する貴重な機会でした。そのため、学生の立場だけではなく、実際の支援や地域づくりに関わっている方々の意見を直接聞くことができ、とても勉強になりました。

分科会を通して、これからの日本では外国人がさらに増えていく一方で、外国人排斥の問題や、外国人に一方的な同化を求める問題がまだ残っていることを改めて感じました。そのような中で、外国人と地域住民とのつながりをつくることは、課題解決の第一歩になるのではないかと学びました。

今回の参加を通して、支援とは一方通行のものではなく、互いに関わり合いながら支え合うことが大切だと考えるようになりました。今後は今回の学びを生かし、自分自身のボランティア活動や卒業論文にもつなげていきたいです。



・活動報告

4) CLA 棟共同企画～D & I (Diversity and Inclusion) Zone～

アジア学院スタディツアー報告

キリスト教センター、国際センター、ボランティアセンターの合同プログラムとして実施されました。アジア学院はキリスト教の精神に基づき作られた学校で、アジア、アフリカ、ラテンアメリカを中心に農村コミュニティワーカーを研修生として受け入れ、約9カ月間の学びを経てそれぞれの農村に戻り、人々に仕える人材を養成しています。

広い敷地には、研修生の宿泊所、研修施設、食堂のほか、農場、家畜、加工食品作業場、コンポスト、養魚場などさまざまな施設があり、全体をキャンパスとしています。この中で食料はほぼ自給しています。

1泊2日の滞在中、キャンパス内を見学したり、世界各国から来るボランティアスタッフと交流したり、手で食べる体験をしたりと「いのちと食べもの」を体感し、自分とゆっくり向き合う時間を過ごします。

日程：6月14日（土）～15日（日）

場所：学校法人 アジア学院（栃木県西那須野）

参加者：国際社会学科1年 3名、心理コミュニケーション学科1年 5名（計8名）

引率：相澤一先生（キリスト教センター）、上條直美（ボランティアセンター）

主催：キリスト教センター、ボランティアセンター、国際センター

受入：アジア学院職員 山下崇さん

【プログラム】

	6月14日	6月15日
	Sat	Sun
7:00		
8:15		8:00 朝食 in コイノニア
9:30		9:30 Foodlife（食べものと命と平和）
12:00		11:00 BBQ
13:30	13:30 那須塩原駅迎え オリエンテーション チェックイン＆ キャンパスツアー トークセッション	片付け・掃除 振り返り 15:30 那須塩原駅へ
18:30	夕食 in コイノニア	
19:30		



共に生きるために

・活動報告



雨の中、キャンパスツアースタート



バーベキューの焚き付け用の枯れ木を
集めているところ



バナナの皮をとってきてお皿代わりに



和風のしつらえのチャペル



最後のふりかえりの時間

チャペルサービスにて報告 7月14日(月)緑園チャペルにて

アジア学院スタディツアー報告～繋がる～

国際社会学科 1年

6月14～15日の二日間、アジア学院スタディツアーに参加しました。

アジア学院は、栃木県那須塩原にあります。アジア学院の教育理念は「有機農業を通してリーダーシップを学ぶこと」です。東南アジア・アフリカからそれらの地域のリーダーの立ち位置にある人々がアジア学院で一年間ほど学び、そして、国に帰りアジア学院での学びを通して村を活性化させられることが最終目的です。

アジア学院ツアーに参加して、沢山のことを学ぶことが出来ました。一つが、命は繋がっているんだと実感したことです。

皆さんはコンポストをご存じでしょうか。コンポストとは生ごみや落ち葉などの有機物を微生物の働きを活用して発酵・分解させ堆肥に変えるためのプロセスを言います。コンポストによって堆肥に変えられる発酵途中の土壌を触った時に、土が温かかったことにとても驚きました。土も生きているのだ、と感動しました。土から、植物が芽生え、牛や豚、鶏などの命へとつながり、そして私達の命へと繋がっていることを実感しました。

普段の食事を見直すきっかけにもなりました。食事に集中せず、スマホを見てしまったり、テレビに夢中になったり。食べ物に向き合っていなかったと反省しました。皆さんも、ここで今一度、どのように食事に向き合っているか、振り返ってみましょう。食べ物に向き合っているのでしょうか。スマホを触りながら食べていませんか。

私たちが何気なく過ごしている普通の生活が、「普通」になるのには沢山の犠牲の上で成り立っているのだと改めて感じました。

アジア学院での、様々な人々が暮らしているからこそそのチャレンジも知りました。

アジア学院にも教会があるのですが、牧師さんに一番難しいことは何でしたかと聞く機会がありました。牧師さんは「様々な人びとと暮らすことが難しいことだ。」と仰っていました。アジア学院には様々な人が集まって有機農業を学びに来ています。文化も、宗教も違う中で、どのように調和を保ち暮らしていくのか、これらのことは「challenge」とも仰っていました。終わったことではなく、今もなお課題として挑戦し続けていくといった思いが感じられました。

こうしたことは現代の日本に大きくつながることだと思いました。互いに調和を保ち暮らしていくにはどうすべきなのか、考えるきっかけとなりました。

今回のアジア学院ツアーをきっかけに、様々なことを見直せる良い機会になりました。このような機会を頂けたことに感謝しています。皆さんも、機会がありましたら是非、来年のアジア学院ツアーに参加してみてください。

アジア学院スタディツアー報告～繋がる～

国際社会学科 1 年

アジア学院の研修に参加した理由は、高校時代に農業を学んでいたこと、そして将来は農業に関わる仕事に就きたいという思いがあったからです。「新しい何かが得られるかもしれない」と思い、参加を決めました。

人前で話すことや、自分から話しかけることが得意ではありませんでした。英語を使ってコミュニケーションを取る場面がとて多く、自分から話しかけないと何も始まらない環境でした。最初はとても緊張しましたが、思い切って声をかけてみると、相手も優しく応えてくれて、次第に緊張もなくなり話すことが楽しくなり、自信にもつながりました。今までにないほど多くの人と話すことができ、自分の世界が広がったように感じました。

さらに、大きな学びとなったのが「食と命」についての考え方です。これまで肉を当たり前のように食べてきましたが、動物の命を「いただく」ということの重みを実感しました。食事をいただくことが、当たり前ではないことに気づき、命への感謝を忘れてはいけないと感じました。

言葉の壁を越えて人とつながる喜びや、命と真剣に向き合う経験を通して、視野が大きく広がりました。将来の仕事や生き方にしっかりと活かしていきたいです。

・活動報告

「戦後 80 年企画 彼女のことを忘れない ～戦時性暴力の記憶～」

主催：ジェンダースタディーズセンター

共催：ボランティアセンター

■企画展

日時：2025 年 7 月 15 日（火）～7 月 25 日（金）13 時まで

開場：大学附属図書館 2 階イベントプラットフォーム

■公開講座

李昤京（リ・リョンギョン）研究教授による公開講義

日時：7 月 17 日（木）13：10～14：40

担当教員：グローバル教養学部国際社会学科 矢野久美子教授

ゲスト：李昤京（リ・リョンギョン）聖公会大学研究教授

テーマ：「文玉珠と森川万智子の絆と人生—証言の証言者—」

会場：緑園キャンパス 7 号館 2 階 7204 教室

藤巻光浩教授による公開講義

日時：7 月 10 日（木）10：40～12：10

7 月 17 日（木）10：40～12：10

担当教員：グローバル教養学部文化表現学科 藤巻光浩教授

テーマ：7 月 10 日（木）「慰安婦問題」の現在と争点の整理」

7 月 17 日（木）「被害者たちの紹介&市民社会における女性国際戦犯法廷の意義」

会場：緑園キャンパス CLA 棟 4 階 2407 教室

■映画上映会&トークショー

学生による絵本「花ばあば」の朗読、映画「私が描きたいこと」（クォン・ヒョ監督、2012 年）の上映、李昤京研究教授を招いてのトークショー。

日時：2025 年 7 月 19 日（土）13：30～16：00

会場：緑園キャンパス CLA 棟 3 階 2302

参加者数：38 名（一般参加者、関係者含む）

「私が変わる、世界が変わる～フェリス卒業生による社会活動の経験から学ぶ～」

小ヶ谷千穂教授

日時：2025 年 10 月 14 日（火）10：40～12：10

講演者：

新倉久乃さん（本学大学院人文科学研究科修了、和光大学研究員、NPO カラバオの会理事）

構二葵さん（本学国際交流学科卒業生。フリーランスジャーナリストとして国内外で活動。

市民発信メディア「8BITNEWS」メンバー）

5) 使用済み切手・書き損じはがきの収集と寄付

使用済み切手、書き損じはがきなどを回収し、日本キリスト教海外医療協力会へ寄付しました。

6) ペットボトルキャップの回収

緑園キャンパス、山手キャンパス合わせて 22 か所に回収 BOX を設置し、定期的に回収を行っています。回収されたキャップは、搬入先として NPO 法人とともにあゆむが引き取り、リサイクル工場にて換金され JCV（認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会）へ寄付されています。

キャップアクションキャンペーン 2025 が 6 月 1 日～30 日に行われました。Instagram にペットボトルキャップが写った写真や動画に「#キャップアクション」を付けて投稿すると、協賛企業各社を通して 1 人分のワクチン支援につながるというキャンペーンで、フェリスボラセンとして参加しました。

集計日	回収数	ポリオワクチン	回収重量	CO 削減量
2010 年度	45,600 個	57.00 人分	114.0kg	359.10kg
2011 年度	60,480 個	75.60 人分	151.2kg	476.28kg
2012 年度	80,539 個	97.30 人分	194.5kg	612.68kg
2013 年度	43,344 個	50.40 人分	100.8kg	317.52kg
2014 年度	58,093 個	67.50 人分	135.1kg	425.57kg
2015 年度	39,904 個	46.40 人分	92.8kg	292.32kg
2016 年度	41,495 個	48.25 人分	96.5kg	303.98kg
2017 年度	36,808 個	42.80 人分	85.6kg	269.64kg
2018 年度	37,152 個	43.20 人分	86.4kg	272.16kg
2019 年度	36,808 個	42.80 人分	85.6kg	269.65kg
2020 年度	24,854 個	28.90 人分	57.8kg	182.07kg
2021 年度	34,271 個	39.85 人分	79.7kg	251.06kg
2022 年度	30,788 個	35.80 人分	71.6kg	225.54kg
2023 年度	30,788 個	35.80 人分	71.6kg	225.54kg
2024 年度	27,606 個	32.10 人分	64.2kg	202.23kg
2025 年度	48,461 個	56.35 人分	112.7 kg	355.01 kg
累計	676,991 個	800.05 人分	1,600.1kg	5,040.35kg

. 活動報告

* 2kg (860 個) でポリオワクチン 1 人分が購入できます。
 (ペットボトルキャップが軽量化され、2012 年 9 月 1 日より 1kg=400 個より 430 個に変更されました)
 * ペットボトルキャップは、仮にごみとして焼却されると 1kg で 3,150g の二酸化炭素が発生します。

キャップの収集にご協力下さった方々に心より感謝申し上げます。



7) 寿町バザーへの支援

バザー献品を募集するためポスターを作成し、学内掲示を行っています。



4 . 学生活動支援

1) ボランティア活動補助費の支給

学生の「ボランティアをしてみたい」を応援するために、活動に対して一定額の補助費を支給する制度です。2025 年度は 5 組の申請があり、支給しました。

事業名	支給額	
ICYE ジャパン カンボジアラーニングセンターでの青少年学習支援	20,000 円	国際社会学科 1 年
団体 ポピンズナーサリースクール芝浦ベイ	40,000 円	音楽芸術学科 2 年、3 年(5 名)
CFF ジャパン マレーシアサバ州「こどもの家」	20,000 円	国際交流研究科 1 年
NPO 法人てらこや千葉 (青少年育成活動)	20,000 円	音楽芸術学科 2 年
学習支援活動 湘南台小学校国際教室	20,000 円	国際交流学科 2 年

・学生ボランティアグループの活動

・学生ボランティアグループの活動

1. 参加学生

2025 年度の参加学生は以下の通りです。

種類	学科・学年・人数	
アンネのバラ園芸ボランティア（5名）	国際交流学科 4 年	1 名
	英語英米文学科 2 年	1 名
	日本語日本文学科 2 年	1 名
	国際社会学科 1 年	1 名
	心理コミュニケーション学科 1 年	1 名
演奏ボランティア（6名）	音楽芸術学科 4 年	1 名
	音楽芸術学科 3 年	4 名
	音楽芸術学科 2 年	1 名
就労支援事業所販売ボランティア（12名）	国際交流研究科 1 年	1 名
	コミュニケーション学科 2 年	1 名
	英語英米文学科 2 年	1 名
	国際社会学科 1 年	5 名
	心理コミュニケーション学科 1 年	3 名
	文化表現学科 1 年	1 名
サークル 「Asteria」（2名）	国際社会学科 1 年	2 名
サークル 「かけはし」（3名）	国際交流学科 4 年	1 名
	国際交流学科 3 年	2 名
サークル 「STUDY FOR TWO フェリス女学院大学支部」（4名）	日本語日本文学科 2 年	3 名
	英語英米文学科 2 年	1 名

2. 演奏ボランティア

1) ポピンズナーサリースクール芝浦ベイ

実施日時	9月4日(木)9時30分～10時45分
場所	ポピンズナーサリースクール芝浦ベイ
対象	0歳～3歳 32名
演奏学生	音楽芸術学科3年4名、2年1名 計5名
演奏内容	1.「とんとんとんとん ひげじいさん」(ピアノ) 2.「小さな世界」(バイオリンとクラリネットの二重奏) 3. ピアノ・バイオリン・フルート・クラリネットの楽器紹介 4.「ミッキーマウスマーチ」(フルートとバイオリン) 5.「幸せなら手をたたこう」(全員合唱)

子どもたちが楽器の音色やリズムを体験し、音楽を身近に感じられるようにすることを趣旨として、開催されました。演奏学科のメンバー5名が子どもに親しみやすい曲を、心を込めて演奏しました。9月4日の開催となり、会場には保育園園児(0歳～3歳)やスタッフが集いました。

【参加学生の声】

- ・一緒に手遊びができる楽曲を選ぶなど、参加型の要素を意識して構成。
- ・子どもたちの反応を意識しながら演奏したことで、相手に伝えるための工夫や場の空気を読む力の大切さにも気づかされました。

2) 四季の会

NPO 法人四季の会センター芽生え 地域交流会で演奏ボランティア

実施日時	9月28日(日)13時30分～15時00分
主催	泉区生活支援センター芽生え
内容	フェリス生による演奏 曲目 虹の彼方に、少年時代、花は咲く、赤とんぼ
演奏学生	音楽芸術学科3年1名、音楽芸術学科2年1名 計2名
演奏内容	演奏、来場者と合唱

四季の会 シンポジウム

実施日時	2月1日(日)13時00分～16時00分
場所	泉区民文化センター(テアトルフォンテホール)
主催	四季の会/泉区生活支援センター芽生え
内容	シンポジウム「地域で暮らし、働き、つながる」 神奈川病院医療相談室SW/横浜西部就労支援センター/ 当事者/いずみ会(家族会)/泉区生活支援センター芽生え
演奏学生	音楽芸術学科3年4名、音楽芸術学科2年1名 計5名
演奏内容	オープニング・クロージング演奏、来場者と合唱 曲目 青い珊瑚礁、ユーレイズミーアップ、残酷な天使にテーゼ、 ハナミズキ、WAになっておどろう

3) だんだんの樹 ミニ演奏会

実施日時	11月29日(土)13時30分～15時00分
主催	コミュニティだんだん
内容	曲目 もろびとこぞりて、ハレルヤ、きよしこの夜、雪だるまつくろう、 恋人がサンタクロース、見上げてごらん夜の星を
参加学生	(演奏)音楽芸術学科3年3名、音楽芸術学科2年1名、 (動画作成)国際社会学科1年1名 計5名
演奏内容	演奏、来場者と合唱

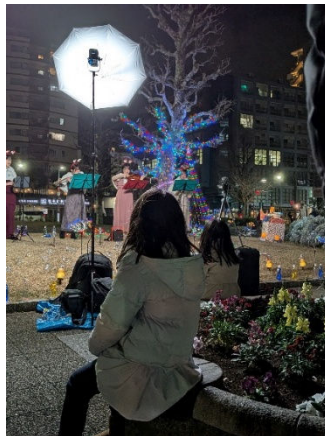
4) めぐみ幼稚園クリスマス祝会

実施日時	12月13日(土)9時30分～ 第1部 ページェント 10時15分～ 第2部 祝会
主催	日本基督教団横須賀上町教会附属めぐみ幼稚園
内容	第二部フェリス生による演奏 曲目 サンタが街にやってくる、きよしこの夜、雪だるま作ろう、 赤鼻のトナカイ、もろびとこぞりて、崖の上のポニョ
演奏学生	音楽芸術学科3年4名、音楽芸術学科2年1名 計5名

・学生ボランティアグループの活動

5) 不老町地域ケアプラザ「日ノ出川公園クリスマスイルミネーション」演奏ボランティア

実施日時	12月19日(金)17時00分～20時00分
主催	社会福祉法人 横浜社会福祉協会 横浜市不老町地域ケアプラザ
内容	第一部ページェント 第二部フェリス生による演奏 曲目 赤鼻のトナカイ、You raise me up、きよしこの夜、メドレー、 レット・イット・ゴー
演奏学生	音楽芸術学科3年3名、音楽芸術学科2年1名 計4名
演奏内容	30分を2回公演



3. アンネのバラ園芸ボランティア

1) ポプリ作りワークショップ

実施日時	6月26日(木) 昼休み
場所	図書館2階イベントプラットフォーム
参加者	一般学生7名、スタッフ学生・教職員7名

国際社会学科 空由佳子先生と一緒にポプリづくりを通して交流会を実施。空先生よりボランティアについてのお話をいただきました。



2) アンネのバラ記念礼拝

【アンネのバラ記念礼拝】6月18日(水)緑園チャペル

奨励 音楽芸術学科3年

皆さんはキリバスという南半球の国を知っていますか。「環礁」という珊瑚礁が環状に成長した地形をしており、ギルバート諸島などの3つの諸島群からなる国です。ラグーンと呼ばれる内海とオーシャンと呼ばれる外海の2種類の海を持っており、非常に豊かな自然で溢れている国です。



私は今年3月に、学校の海外環境フィールド実習を通してこの国を訪れました。初めて足を踏み入れたその場所は、自然のパワーと美しさが溢れていました。例えば、キリバスは環礁国である上、最高到達地点でも海拔3mほどしかないため、まるで太平洋の真ん中にいるのではないかと思うほど海が近く感じました。外海は波が荒々しく、果てしない太平洋が広がっているのに対し、内海は穏やかでエメラルドグリーンの海が輝いており、全く表情が異なるのです。また、素晴らしい満天の星空が夜を彩り、日本からは見ることができない南十字星も観測することができます。まさに先ほど読んでいただいた詩篇8編3,4章にもあるように、神の偉大さやその力がその雄大な自然に現れていました。

しかし、そんな美しさの裏には多くの課題がありました。キリバスは経済規模が非常に小さく、オセアニアで最も貧しい国の一つともされています。それに伴い、安い輸入商品が中心になってしまっている食生活や、トイレの不足といった衛生環境に課題が生じています。また制度が十分でない・国民の衛生観念が育まれていないことを原因に、車の路上投棄などの廃棄物処理も問題になっています。

私は今回の実習に参加する前、「キリバスの自然の豊かさを見て、それを守るためには何ができるか学ぼう」と考えていました。しかし実習を通して、「日本の環境がどれだけ整っているのか」という実感も得ました。水や電気が不自由なく使えること、道や公衆施設が清潔なこと、食べ物の衛生管理が徹底されていること。それらを享受できている恩恵や、私たちが持つことができている高い衛生観念を当たり前と思わないようにしたいと強く思いました。

またそのようなことは実際に違いを肌で感じないと理解することはできないことも、大きな気づきでした。環境保全のためのアクションはたくさんありますが、「知りに行く」こともその一つであると言えます。自国でできることが当たり前じゃないことを体験することで、日常生活の様々なシーンで環境への恩恵を感じ、行動し続けられるのではないかと考えます。

温かい住民の方々と豊かな自然で溢れているキリバス。豊かな暮らしを支えてくれる方々がいて、その制度がある日本。そして世界中の人々を、賛美歌第2篇144番にあるように、神はひとりずつ目をとめられ守られています。そのことへの感謝を忘れないようにしたいと感じています。そのために、自分の幸せは誰に支えられているのか、他人の幸せはどのようなものか、それを守るために私にもできることは何かと、あらゆるものを「知りに行きたい」です。

ここで、先ほどもご紹介した、賛美歌2篇144番「すみわたる大空に」という曲を演奏していただきます。歌詞をスクリーンに投影しますので、みなさんぜひ歌っていただくと嬉しいです。

【アンネのバラ植樹記念礼拝】11月14日（金）緑園チャペル

奨励 心理コミュニケーション学科1年

『イエスが与えた愛』

私が通っていた中学校は所謂ミッションスクールでした。学校の倫理の授業の中でとても印象に残った聖書の箇所があります。

それがヨハネによる福音書13章34節「私があなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」という箇所とマタイによる福音書5章44節「敵を愛し、迫害する人のために祈りなさい」というものでした。当時中学生だった私にはとても衝撃的で、正直初めて読んだときは理解ができませんでした。中学生とはとても多感な時期で、些細なことで人を攻撃してしまいます。私自身、友達の発言で傷ついたりすることが沢山ありました。悪意のある発言はもちろん、悪意のない発言にも傷つき、そのたびに相手を憎んでいました。

人を愛するという事は当時中学生だった私にはとても難しいことでした。しかし、少し時がたち改めて聖書のお言葉を読んだとき、「愛すること」の意味とその重要性に気づくことができました。

人を愛することで重要なのは「私があなた方を愛したように」という点です。

この言葉が語られたのは、イエスが十字架にかかる前の夜でした。イエスは弟子たちと最後の食事をしていた時に語られました。その時、イエスは弟子たちの足を洗いました。当時、足を洗うのは奴隷や召使いなど身分の低いものがすることでした。しかしイエスは神の子でありながら、弟子たちの前に跪き、静かに足を洗いました。その中にはこれからイエスを裏切るユダもいました。イエスはそのことを知っていながら、ユダの足も同じように洗い、愛を持って接されました。この姿こそが「私があなたがたを愛したように」という言葉の意味を表しています。

イエスから与えられた愛は見返りを求めない無条件の愛、つまりアガペーなのです。私たちもその愛にならい、自身とそりの合わない人でも愛をもって接することが大切なのです。

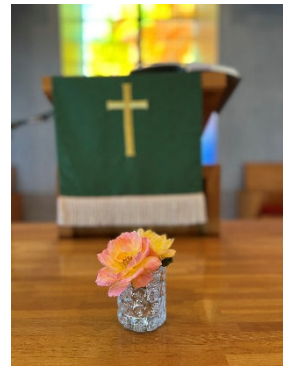
ですが、私たちの日常では、それが難しいときがあります。人間関係でうまくいかない時、嫌なことを言ってくる人、考え方が合わない人に出会うことがあります。そんな時、イエスのもう一つの言葉を思い出します。「敵を愛しなさい。迫害するもののために祈りなさい」というお言葉です。

この言葉を聞いた時、とても驚きました。敵を愛するなんて簡単にできるようなことではありません。

ですが、この愛はただ仲良くする、相手を好きになるという意味ではありません。イエスが言いたかったことは相手のために祈る事や憎しみではなく優しさを選ぶことなのです。

たとえば誰かに嫌なことを言われたとき、その人に同じように言い返すことは簡単です。ですが、イエスは「その人にために祈りなさい」と言われました。「どうかこの人の心の中にも平和がありますように」そう祈ることで、相手が変わるわけではありません。しかし、自身の心の中の怒りや悲しみを癒すことができます。

私自身、大学生になった今でも友人と些細なことで言い争いになってしまうこともあります。しかし、そんな時は一度冷静になって考えてみます。私たちは喧嘩をしたい訳ではないのです。そうしてイエスのお言葉を思い出し、思い祈ってみました。そうしたことで不思議と心



・学生ボランティアグループの活動

が軽くなったのです。相手のために祈ることは自分のためでもあったのです。

イエスの愛は、言葉だけでなく行動で示された愛です。イエスは十字架にかけられる直前も「父よ、彼らをお赦しください」と祈られました。その愛の深さは到底真似出来るようなものではありません。ですが、私たちはそんなイエスの愛を受けているのです。その愛を私たちが少しでも見習い、愛を広げることこそが私たちの世界をより良くする第一歩であると考えます。

私たちは完璧ではありません。愛することが上手くいかない時もあります。ですがイエスはそれでも私たちのことを愛してくださっています。だからこそ、私たちも少しずつ、イエスの愛に近づいていけばよいのです。

今日はこのように愛について考える時間を与えていただき、ありがとうございます。



3) 植樹式

今年新たに5本の苗をお迎えしました。アンネのバラ植樹記念礼拝後、花壇にて苗を植え、相澤先生に祝祷をしていただき新しい命をお祝いしました。



・学生ボランティアグループの活動

4) アンネのバラフォトコンテスト写真展

学内でフォトコンテストを開催し、11 枚の写真が提出されました。順位付けをせず全部の作品を学内 3 か所(図書館 2 階イベントプラットフォーム、ボランティアセンター前、国際センター前) にて展示をしました。

6 月 18 日記念礼拝後、応募者の皆さんへ、センター長からのメッセージとともにボランティアセンターコーディネーターより、参加賞の賞品を贈呈しました。

学内展示の様子



図書館 2 階 イベントプラットフォーム



ボランティアセンター前



国際センター前

・学生ボランティアグループの活動

贈呈式【ボランティアセンター長からのメッセージ】

「アンネのバラ」フォトコンテストに応募していただき、ありがとうございます。また、このコンテストを含むボランティアセンターの活動に関心をもっていただき、ありがとうございます。

本学にも咲いているアンネのバラには、アンネ・フランクの父オットーをはじめ多くの人々の思いが込められています。それをフェリスで生活しているわたしたちが受け継いでいることは、とても重要なことだと思います。

オットーは、「戦争と差別のない世界になってほしい」というアンネの思いを伝えるために彼女の日記を出版しました。が、それから約 80 年経ち、政治と経済と歴史と宗教が複雑に錯綜する現在の世界では、第二次大戦において犠牲者であったアンネの民族の国イスラエルがガザおよびイランを攻撃しています。ロシアとウクライナの戦争も続いています。どの国が攻撃者でどの国が犠牲者なのか、もうわかりません。それを決めるのは最終的に勝った側の国なのでしょう。

ただ、戦争が関係する国すべての人々の生活を破壊すること、勝敗に関係なくすべての国の人々が多かれ少なかれ犠牲となることはわかっています。戦争とは、武力で政治的・経済的利益を実現するという行為です。どれほどの利益や満足をもたらそうと、道義的にそれが正しくないことは、心あるすべての人が理解しているはずです。

どうすれば戦争をなくすことができるのかは誰にもわかりません。「戦争をなくそう」という人たちが信用できるかどうかともわかりません。そんな不確かな世界のなかでわたしたちは、戦争に対する批判を美しい薔薇で表現していきたいと思っています。美しいアンネの薔薇を見るたびに、平和で美しい世界が実現するように祈りたいと思います。

そのような活動に今後も引き続き参加していただけたら、とてもうれしく思います。どうぞよろしくお願いいたします。今日は本当にありがとうございました。



5) アンネのバラ園芸ボランティア 2025 年度研修会

< 研修会 >

実施日時	2025 年 8 月 21 日 (木)
実施目的	戦後 80 年に平和を考える
参加者	アンネバラ学生スタッフ 国際交流学科 4 年 1 名 英語英米文学科 2 年 1 名 日本語日本文学科 2 年 1 名 国際社会学科 1 年 1 名 心理コミュニケーション学科 1 年 1 名 富樫センター長、上條コーディネーター、職員 1 名 (計 8 名)
スケジュール	10:00-10:20 集合：地下鉄九段下駅 1 番出口 集合 靖国神社遊就館 到着 10:20-12:00 見学 12:00-13:00 昼食 14:00-16:30 昭和館へ移動 (徒歩 10 分) 国立昭和館 見学 17:00 現地解散

本研修会は、アンネのバラ学生ボランティアより、「平和・人権」をテーマとする活動を推進するために研修会を行いたいという要望から企画されました。国際センターの広島スタディツアーに参加した学生から、引き続き戦争の歴史について学びたいという提案があり、学生と一緒に相談して訪問先を決定いたしました。

< 感想 >

遊就館の感想

【主な展示について】(一部抜粋)

人間魚雷回天、零式艦上戦闘機、兵器、出征兵士の遺書の展示

- ・展示物の真っ黒な魚雷を見ながら、100%死ぬという状況で突撃をするという究極の非人道的な兵器がどうして同じ人間によって作られてしまうのか、人間の恐ろしさを目の当たりにした気持ちにさせられた。
- ・映像や教科書でゼロ戦や回天を見たことはあったが、実際の大きさのものを見たのは初めてだったため印象に残った。思ったよりも大きく驚いた。国のために、死ぬと分かっているこれらの兵器に乗らないといけなかった方たちは、どのような気持ちで乗ったんだろうかと考えた。人間魚雷の狭さと暗さに、眺めているだけでも恐ろしい気持ちになった。
- ・「零戦」「桜花」「回天」などは知っていたが、実物を見るのは初めてだったので印象に残った。「零戦」を実際に見て、思っていたよりも小さいように感じた。1 人乗りなのでそこまで大きいと思っていたわけでもないが、敵艦に体当たりをすると考えると、生身で突っ込む

・学生ボランティアグループの活動

ようで心もとないというか、恐怖が凄まじいと思い本当に覚悟が要ることだと思った。

- ・同年代の人々が、死を覚悟せざるを得ない状況に置かれていたことを実感したから。

構成について

- ・遺影や遺品と共に戦争の歴史を辿っていくという構成に驚いた。「英霊」を祀り、展示している場所なのだと改めて理解した。10 歳未満から戦争の本などに触れてきて、小学生の頃などは特に、若くして亡くなった兵士が多いとは思っていたが、彼らは自分より年上の大人だと思っていたが、大学生になった今、遺影とそこに書かれた年齢を見て、自分と変わらない年齢の人や年下の人も多く、こんなに幼くも見える程若い人たちが戦って亡くなったのかと、昔とは違う感情で受け止めた。

幕末の時期の展示

- ・幕末の時期の歴史的出来事を、尊王攘夷派の立場からのみ捉えているところが歴史の中立性を欠いているという印象を受けた。また、全体的に日本史の通史として戦争や戦いの歴史という側面から展示されていて、政権（権力）をめぐる戦い＝歴史という、私たちの歴史のごく一側面なのに、遊就館の展示内容は、日本の学校教育の教科書に内容が重なるところが多いということに気づいた（展示内容が、学校で習ったことばかり）私たちは知らず知らずのうちにこれが日本の歴史だと強く印象づけられていることを改めて実感した。

立山英夫の遺書

- ・母親への思いをつづった詩の最後に「お母さん お母さん お母さん」と24 回も繰り返し書かれているのが印象に残った。見習い士官で初陣だったということはエリートであり自ら志願して軍人になったと考えられるが、そのように覚悟を決めて戦地に行った人でも、遠くにいる母親を思い、不安に駆られ、思いをつづっていることに、戦争の恐ろしさと軍人の人間味を感じた。
- ・軍服の内ポケットにあった母の写真の裏面に、母を思う長歌が書かれてあった。生きてお母さんに会いたかっただろうと、兵士の無念を思うといたたまれない気持ちになり、改めて戦争の悲惨さを思った。

【遊就館全体の感想】

- ・歴史を学ぶ上で一度は見るべき場所であると考えていたので、今回行くことができ勉強になった。また、戦争に関わる展示の中立性について考えさせられた。
- ・靖国神社の特性上、「二度と悲惨な戦争をしない。」ための展示より、国のために戦った兵士を称える展示だった。政治家が靖国神社を参拝すると、政治的に問題になることがあるが、その理由がよく分かった。まだ見切れなかった展示もあったため、今度もう一度行ってみよう。
- ・戦死者を「英霊」とし、戦死した人々の遺影を遺品と共に展示し、戦績を示している構成や、死ぬことを「戦死を遂げた」「玉砕した」「散華した」「自決した」などと表記されていることが、国のために死ぬことを良しとして美化しているように感じ、自分とは戦争に対する考えや価値観が異なると感じた。

昭和館の感想

【主な展示について】

戦時下のポスター、特別企画展のポスター

- ・今でも慣用句のように使われる言葉に、戦争を煽るために使われた言葉があることに気づき、使うときに気を付けなければと思った。(勝って兜の緒を締めよ、月月火水木金金など)
- ・どれも印象に残るものばかりで、プロパガンダのポスターとしてとても優れた作品だったのが分かった。芸術が政治に利用されてしまうのは、悲しいことだと思った。
- ・戦争のプロパガンダポスターはいくつかは見たことがあったが、このように様々なものが数多く作られていたことがすごいと思った。画家や漫画家などもポスターの製作に携わっていたことを初めて知った。戦争を推進するようなポスターには反対だが、単純にポスターとしては人の目を引く構成や色遣いになっていて、よく考えて作られた、宣伝や訴えかけとしては効果が高いであろうものすごいと思った。

砂糖のヤミ価格、疎開先で胃腸薬を食べる子どもたち

- ・基準価格とヤミ価格の対比において需要の多い主食のお米よりも、嗜好品である砂糖の方が倍率が高いことに驚いたから。
- ・苦いはずの薬をラムネのように食べる姿を想像し、いかに当時の食糧事情が厳しいものであったのかを物語っていたから。

千人針

- ・とても細かく綺麗に縫われており、「無事に帰ってきてほしい」という思いが見ているだけで伝わってくる様だった。

石川光陽写真展

- ・空襲で被災したきょうだいの写真が印象的だった。両親が行方不明で引っ越すために家財を乗せたりヤカーを兄が引き、その後ろを幼い弟妹が歩いている写真で、『火垂るの墓』の清太と節子を想起させられた。親を亡くした子どもだけで生きるしかなかった子どもは現実に少なくない人数いたのだろうと思ったし、その中には栄養失調などで亡くなった子もいたのだろうと思った。写真の彼らがその後どうなったかは分からないが、生きて大人になってほしいと思った。
- ・警視庁のカメラマンとして写真を撮り続けた人という来歴自体とても興味深い。何万枚の写真の中から数十点が展示されている。退庁後、生涯をかけて写真集を編纂したということだが、歴史の証人としてどんなことを感じていたのか聞いてみたかった。
- ・「ひざまずく人々」という写真が特に印象に残っている。玉音放送によって戦争の終結が伝えられた時、どのような気持ちだったのだろうかと考えた。戦後の復興の様子も写真に撮られていて、焼け野原から復興した町の様子に感動した。改めて先人たちの努力の上に、今の私たちの生活があることを実感した。

三種の神器

- ・教科書で見たのとは違い実際の大きさや、今とは違う丸みを帯びた形を実感したから。

・学生ボランティアグループの活動

玉音放送

- ・玉音放送の一部である「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」という部分はよく目にするので知っていたが、全文を目にすること、実際の昭和天皇の声で全文を聞くことは今までなかった。まず、その文章の長さに驚いた。また、昭和天皇が日本及び日本国民をととても愛していたのだと感じた。

【昭和館全体の感想】

- ・およそ 100 年で市井の人々の暮らしが劇的に変化していたことに、時代の流れの速さを感じた。
- ・戦争当時の暮らしから、復興後の暮らしまで学べる事が出来た。戦時下ではとても苦しい環境の中暮らしていたのだと改めて実感した。
- ・今まで写真でしか見る事のなかった戦中の道具や衣服などを実際にみる事ができて良かった。『食べられる野草』など、代用食など生活に関する解説書が出ていたことを知り驚いた。頭髪を縫い込んだ旗にとっても驚いた。

研修会全体の感想

- ・アンネのバラチーム全員で何かをすることが初めてだったので貴重な経験になりました。最初で最後の研修会に参加できて良かったです。ありがとうございました。
- ・戦後 80 年という節目にボランティアセンターの皆さんといけて、貴重な経験が出来たと思いました。来年は長崎へ行けたら嬉しいです。その時は事前の研修会や振り返り会等企画し、より実りある研修会にしたいです。
- ・今まで本や映画、写真などで戦争について知る機会は多く、ある程度の知識も持っていた。しかし、今回の研修会では、軍人の遺影や遺品、遺書や、庶民の生活用品や服、プロパガンダポスターなどの実物を直接目にする事で、戦争が実際に人々の命と暮らしの中で起こった現実であることを強く感じた。人々やその暮らしに触れることができて良かった。



4. 就労支援事業所販売ボランティア

【販売期間】2025 年 5～7 月、10～12 月、計 20 回

【販売場所】CLA 棟 2 階国際センター前

【2025 年度の参加事業所】

* NPO 法人いずみの輪が運営する事業所「和輪工房」(幹事団体)

* NPO 法人でっかいそら(幹事団体)

(参加団体)

・社会福祉法人ぴぐれっと

・NPO 法人なかだ

・社会福祉法人あゆみ会 おれんじ村

・社会福祉法人いずみ苗場の会 つぼみの家

2024 年度より横浜市泉区障害福祉自立支援協議会に所属する就労支援事業所により、フェリス女学院大学構内での自主製品の販売が行われています。当事者が中心となって販売することを目指しています。

商品は施設毎に異なり、ピザ、シフォンケーキ、焼き菓子、コーヒー、ドライフルーツ、うどんなど多種多様です。

学生ボランティアは、机や椅子の設営や販売の手伝い、団体の皆さんとの交流、SNS などの広報活動を行いました。

【参加学生の感想】(一部抜粋)

・販売がすごく楽しかったです。皆とたくさん話を共有し、皆と抱き合いながらお互いに「一緒に頑張りよう」など励ましあい、本当に癒されました。

・販売員の方が可愛かったです。またフェリスに来て欲しいなと思いました。とても楽しく交流することができたと思います。

・販売員の方は緊張されていた感じでした。ですが、時間が経つにつれ慣れてきたというのと、販売が成功していったおかげで喜びの方が出たのか、嬉しそうな表情が多くなり、良かったです。



5. ボランティアサークル活動

ボランティアサークル

ボランティアサークルも公認団体・サークルも、学生生活をより充実させるためという意味では同じですが、ボランティアサークルは社会貢献や社会のための活動、人のための活動に重点が置かれています。2025 年度学内で募集し、3 団体が登録しました。

サークル名：Asteria

活動内容：国際協力関係のボランティア活動へ参加し、報告を行います。

- ・カンボジアでの教育ボランティアに参加 など

サークル名：かけはし

活動内容：韓国語、ミャンマー語（ビルマ語）などの通訳。NGO / NPO におけるボランティア活動経験を深めることを目的として活動。国際交流イベントなどに参加している。

- ・JVCC（コーディネーション研究集会）への参加 など

サークル名：STUDY FOR TWO (SFT)フェリス女学院大学支部

活動内容：古本・CD/DVD などを回収し、再販売することで得られた収益を途上国の子どもたちの教育事業を行っている NGO へ寄付する。

古本回収作業

回収場所：学内 4 か所

- ・ボランティアセンター内（CLA 棟 2 階）
- ・学生ホール
- ・8 号館 1 階ラウンジ
- ・7 号館言語センター内

回収期間：2025 年 10 月 1 日～2026 年 1 月 23 日

回収結果：

- ・古本 362 冊
- ・CD 204 枚
- ・DVD 18 枚



・学生ボランティアグループの活動

・フェリス女学院 × A.cafe × 新橋地域ケアプラザ

高齢者向けの楽しいスマホ教室

【共催】STUDY FOR TWO フェリス女学院大学支部

フェリス女学院大学ボランティアセンター

A.cafe / 新橋地域ケアプラザ

実施日時	2026 年 2 月 23 日 (月) 13 : 30 ~ 15 : 30
場所	A.cafe
参加者	スタッフ学生・職員 5 名



新橋地域ケアプラザで月 1 回実施しているスマホ教室が常に満員で潜在的なニーズの高さがあり、住民の皆さんが行きやすい緑園都市駅の近くでやったらどうかということになりました。ボランティアサークル Study for Two フェリス支部の学生が、スマホ教室の企画運営を担いました。スマホ教室だけでなく、「お茶を飲みながら交流する」というお楽しみ要素もプログラムづくりの中で意識したところです。

【参加者の声】(一部抜粋)

- ・いくつか解決できたことがあってとてもよかった。
- ・知らない方と知り合えてよかった
- ・これからもスマホ教室をやってほしい
- ・(若い方とおしゃべりして) 昔を思い出した

【学生の感想】

・日本語日本文学科 2 年

スマホの使い方を人に教えるのは今回が初めてだったため、参加者の方々にうまく教えられるかという不安がありました。しかし、いざ始まってみると、聞かれた質問にもスムーズに答えることができ、最終的には楽しみながら取り組むことができました。教える際には、相手のペースに合わせて分かりやすい言葉を使うことや、はっきりとした声で話すことを意識しました。また後半には、SFT の活動紹介を行う時間もありました。参加者の方々に少しでも SFT の魅力が伝わっていれば嬉しいです。地域の高齢者の方々と直接関わる機会は普段あまりないため、とても新鮮で貴重な経験となりました。私たちは『地域との協力を活発に！』という活動理念を掲げているので、これからも地域の方々との交流を大切にしながら、今後もイベントなどを開催していきたいと思います。

・英語英米文学科 2 年

今回、初めて SFT として地域の方との交流の場に参加しました。普段はなかなか地域の方とお話する機会がないので、今回このような場に参加できたこと自体が、とても貴重でありがたい経験でした。スマホを教えるのは初めてで、当日は不安もありましたが、参加者の皆さんがとてもあたたかく接して下さり、安心して関わることができました。実際に説明

・学生ボランティアグループの活動

してみる中で、教えることや複数人に伝えることの難しさも感じ、自分の中で改善していきたい点がいくつも見つかりました。今後にもつながる貴重な経験になりました。

・日本語日本文学科 2年

これまで何度かイベントに参加させていただく機会 was ありましたが、企画の段階から関わらせていただけたのは今回が初めてで、とても貴重な経験となりました。スマホを教えるのも初めてで、緊張もありましたが、参加者の皆さんと雑談も交えながら、楽しい雰囲気を実施することができて良かったです。これからも、地域の方々との交流を大切にしながら、活動していきたいと考えています。

・日本語日本文学科 2年

今回のイベントは、企画側・対高齢者・スマホ教室ということで初めてづくしとなりました。手探りで進めることも多く、緊張したり戸惑う場面もありましたが一緒に企画側となった新橋ケアプラザの皆様・A.cafe の皆様のフォローやボランティアセンターからのサポートのおかげで大きなトラブルも無く、成功させることができました。今回のイベントが地域との交流の第一歩となるようにこれからも頑張りたいと思います。



6. ボラカツポイント制度

今年度からボラカツポイント制度を始めました。ボランティアセンターの運営に関わるパートナーを増やすため、新入生向けボランティア説明会、ボランチの運営、ポスター・ちらし作成、礼拝などに協力することにポイント付与され、10ポイントたまると「ボランティアセンターパートナーシップ証明書」を授与されます。2025年度は、28名が登録、活動に参加しました。



・ NPO インターンシッププログラム

NPO インターンシップは、NPO 法人アクションポート横浜（市民活動支援 NPO）の実施事業で、横浜近隣地域の NPO で大学生がインターンシップを行い、地域貢献を通して学生が成長する場を提供しているプログラムです。活動先は、「福祉」「国際協力」「子育て支援」「環境」「まちづくり」など多岐にわたります。

神奈川県下を中心に、明治学院大学、桜美林大学、横浜商科大学、横浜市立大学、神奈川大学、専修大学、関東学院大学、東海大学、フェリス女学院大学が授業や課外活動の一環として参加している他、一般学生の受け入れも行っています。今年度修了生は、プログラム全体では長期 14 名、短期 45 名、フェリスからは下記のように 6 名の学生を派遣しました。受け入れ団体は約 23 団体。

短期体験コース 10 日間（80 時間程度）体験を目的。研修生として位置付け

長期実践コース 3～6 カ月程度（200～400 時間程度）週 1，2 回（長期休みは週 3 日程度）
課題発見・解決、プロジェクトの実施等スタッフとして位置付け

< 派遣学生 >

短期：片倉うさぎ山プレイパーク	コミュニケーション学科 3 年 1 名
アクションポート横浜	国際社会学科 1 年 1 名
ピッピ親子サポートネット	文化表現学科 1 年 2 名
長期：NPO 法人横浜 NGO ネットワーク	国際交流学科 2 年 1 名

全体の活動スケジュール

活動	日程
（学内での説明会）	4 月 23 日（水）昼 ボランチにて実施
募集説明会	5 月 15 日（木）19:00-20:00 オンラインにて実施
学生と NPO の相談会 大学と NPO の情報交換会	6 月 7 日（土）@横浜市立大学金沢八景キャンパス
学生と NPO の面接	6 月～7 月 対面・オンライン
事前研修会	7 月 5 日（土）@横浜商科大学つるみキャンパス
（短期）成果報告会	10 月 25 日（土）@明治学院大学横浜キャンパス
（長期）成果報告会	2 月 25 日（水）@かながわ県民センター

・国際機関実務体験プログラム

公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）を通じてみなとみらいにある横浜国際協力センターに入居している国際機関・YOKE で実務体験を行います。横浜市内 6 大学（神奈川大学、國學院大學、明治学院大学、横浜市立大学、横浜国立大学、フェリス女学院大学）が参加。

受入国際機関は、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）、国際熱帯木材機関（ITTO）、国連食糧農業機関（FAO）駐日連絡事務所、シティネット横浜プロジェクトオフィス、特定非営利活動法人 国連世界食糧計画 WFP 協会、独立行政法人国際協力推進機構横浜国際センター（JICA 横浜）YOKE の 8 機関となっています。

今年度のフェリスからの派遣状況は以下の通りです。

派遣内容

夏期：公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）

2025 年 8 月 7 日～10 月 9 日

国際社会学科 1 年 1 名

春期：公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）

2026 年 2 月 5 日～3 月 27 日

国際社会学科 1 年 1 名

3 月 27 日（金）に国際機関実務体験プログラム（春期）の最終報告会が行われ、フェリスからは国際社会学科 1 年 1 名が参加し、充実した内容であったことがうかがえる素晴らしい発表が行われました。

国際機関実務体験プログラムは、2005 年に開始し、これまでに 49 名のフェリス生が参加し、貴重な体験をしてきました。みなとみらいにある横浜国際協力センターは、横浜市が地球規模の課題に取り組む国際機関や横浜の国際化に貢献する団体などを支援するために開設したセンターで、本プログラムではセンターに入居する団体に、JICA 横浜（独立行政法人国際協力機構横浜センター）を加えた各機関で、実際のオフィスワークを体験できるという特徴を持ったプログラムとしてスタートしました。コロナを経てリモートワークなど働き方が大きく変わり、「実務」の内容も変わってくる中で、「実務体験」から「活動体験」へと変わってきました。

ここ数年は、横浜市国際交流協会が横浜市全域で実施している各事業をもとに学生の興味関心に沿ったプログラムを組んでいただき、国際交流ラウンジで直接こどもたちの日本語支援活動に参加するなど体験型のプログラムになっています。

・国際機関実務体験プログラム

【参加した学生の声】

・国際社会学科 1 年

私は YOKE で 2 月～3 月までインターン派遣生として実務体験をしました。YOKE の様々な事業を見学する中で、ウクライナカフェ「ドゥルーズィ」の日本語教室に参加しました。その際、授業を担当していた方から「あなたのように日本語学校に通えた人もいますが、通えない方もたくさんいます。この経験をこれからに活かしてほしい」と言われました。その言葉がとても印象に残り、心に強く響きました。

同時期に他大学からの派遣生 2 名が YOKE で一緒に活動しており、3 名のチームで共同プロジェクトを実施することになっていました。何をするか話し合う中で、「本を作る」というアイデアが出ました。そこで私たちは、日本語学校に通えない日本語初心者の方に向けた本を作ることをプロジェクトとして決めました。

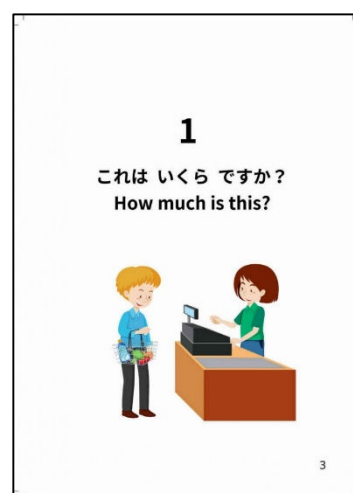
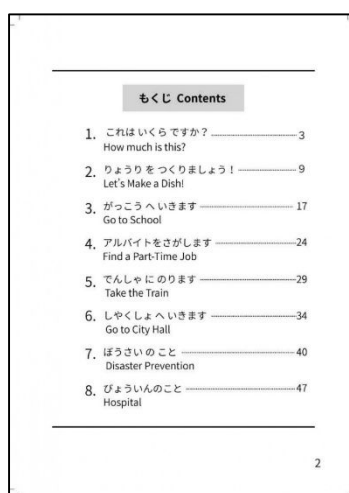
本を作成する中で一番大変だったのは、日本語初心者の視点に立ち、「どのような情報が必要なのか」「どのような表現が分かりやすいのか」を考えることでした。

私は外国人の立場からアイデアを出し、他のメンバー 2 人は日本人の視点から自然な日本語表現を考えました。その過程でお互いに学び合いながら、異文化の良さを実感しつつ作品を完成させることができました。

インターンが終わったあともこの異文化交流をもっと知ってもらうために、サークル「Glocul」を 3 人で発足させ、異文化交流の輪を広げていきたいです！

「ドゥルーズィ」とはウクライナ語で「ともだち」を意味します。

成果物（一部抜粋）



・学習支援ボランティア

・学習支援ボランティア

近隣小学校からの募集に応える形で始まった学習支援ボランティア活動は、年々そのニーズが高まっています。年間を通した継続的な活動として学生の参加が徐々に増えています。今年度は以下の8名が参加しました。

横浜市立本宿小学校	国際交流学科 2 年 1 名
横浜市立鶴ヶ峰小学校	国際社会学科 1 年 3 名 心理コミュニケーション学科 1 年 1 名
藤沢市立湘南台小学校	国際交流学科 2 年 1 名 国際交流学科 3 年 1 名 文化表現学科 1 年 1 名

以下、常時募集を行っています。

1) 小学校

【横浜市立本宿小学校】学習支援ボランティア

活動日時	応相談	対象	1～6 年生の一般学級または個別支援学級
活動内容	授業中に教室の中で学習支援障がいのある児童に対する学習や学校生活の支援や希望者には校外学習の付き添い	場所	相鉄線「鶴ヶ峰駅」から徒歩 12 分

【横浜市立鶴ヶ峰小学校】特別支援教育支援員または子どもの学び支援ボランティア

活動日時	週に 1 日程度。一回につき 2 時間程度、あるいは半日、あるいは 6 時間程度	対象	1～6 年生の一般学級または個別支援学級
活動内容	個別学習支援、個別支援級補助、一般学級補助等個に応じた学習の支援（算数、国語等）	場所	相鉄線「鶴ヶ峰駅」から徒歩 7 分

【藤沢市立湘南台小学校】学習支援（特別支援学級、国際教室）ボランティア

活動日時	(1)特別支援級：授業期間中の授業時間内（8：30～15：15） (2)国際教室：8：30～17：00	対象	1～6 年生
活動内容	特別支援級および国際教室在籍児童の学習支援	場所	「湘南台駅」（小田急線・相鉄線・横浜市営地下鉄）徒歩 10 分

・学習支援ボランティア

【横浜市立坂本小学校】学習支援（特別支援学級、国際教室）ボランティア

活動日時	応相談	対象	1～6年生
活動内容	授業中に教室の中で学習支援障がいのある児童に対する学習や学校生活の支援や希望者には校外学習の付き添い	場所	相鉄線「上星川駅」から徒歩5分

2) 中学校

【横浜市立岡津中学校】学習支援サポーター

活動日時	毎週水曜日 14時半頃～（50分程度）	対象	中学校1～3年生まで
活動内容	学習サポート	場所	いずみ野線「緑園都市駅」から徒歩20分

【横浜市立旭中学校】教育活動支援

活動日時	週に1日程度。曜日は応相談	対象	中学校1～3年生まで
活動内容	(1)保健体育科は水泳授業のプール内の監視活動 (2)希望があれば、来校できる日の教育活動補佐 (3)個別支援学級は、教育活動補佐(通年で来校できる曜日)	場所	相鉄線「二俣川駅」からバス10分

3) 子ども食堂

【コミュニティだんだん 学習応援子ども食堂】 場所の都合で人数制限があります。

活動日時	毎週水曜日 15時～19時頃	対象	学習を希望する小学生と中学生
活動内容	子どもたちが宿題や課題をもってくるのでそのお手伝い、一緒に遊ぶ 食事の準備	場所	いずみ野線「弥生台駅」から徒歩5分

・学生による活動報告

NPO インターンシップ報告 NPO 法人アクションポート横浜

国際社会学科 1 年

NPO インターンシップの活動として、私はアクションポート横浜で短期インターンに参加しました。大学 1 年生として初めての社会経験であり、地域の NPO と関わりながら「環境」や「地域活性化」をテーマに活動する機会を得たことは、私にとって大きな挑戦でした。ここでは、活動のきっかけから得た学び、今後への展望までを振り返りたいと思います。

1．なぜボランティア活動を行ったか

大学入学以前は、NPO やボランティア団体の方々と関わる機会がありませんでした。大学生となり、何か新しく自分が熱中できるもの、または自分の居場所を学校以外でも見つけたいと考えていた際に出会ったのが、NPO インターンシップでした。

しかし、どのような活動を希望すべきか明確に定まらず迷っていたところ、説明会で 3 年生の NPO インターン経験者が「やりたいことが見つからない方にはアクションポート横浜をおすすめします」とおっしゃっていました。アクションポート横浜では、企画運営に携われると伺い、高校時代まで特別な経験のなかった自分に合っていると感じ、応募を決意しました。

2．当初の目的を達成できたか

私の目的は、「企画に携わる際に失礼のないようにイベントを無事成功させること」と、「企画案を立てる場合は前日までに準備を終え、連絡が来た際には半日以内に返信できるようにすること」でした。結果として、この 2 つの目標はある程度達成できたと感じています。インターン期間中は、横浜資源循環公社の方々と協力し、環境問題に取り組む現場を見学する「エコツアー」の企画・運営に携わりました。実施までの期間は約 2 か月と短いものでしたが、周囲の方々のご協力もあり、無事に成功を収めることができました。しかし一方で、エコツアー開催に向けた準備では、前日までに司会台本が完成していなかったり、当日事務所から持参する物品が決まっていなかったりと、直前まで作業が続いてしまう場面が多くありました。また、スケジュールの見直しが不十分で、トイレ休憩の時間が短くなるなどの課題も見られました。そのため、「企画案は前日までに仕上げる」という目標については十分に達成できたとは言えませんでした。

3．活動の中で発見したこと

活動を通して、「学生が企画や運営に取り組む際に、大人はどのように感じているのか」という点について、自分なりに多くの発見がありました。アクションポート横浜では、横浜資源循環公社の方々や横浜の中区長、そして他の NPO 団体の皆さんと交流する機会が多くありま

．学生による活動報告

した。その中で、大人の方々が学生をどのような思いで支えてくださっているのか、またどのような悩みを抱えているのかを知ることができました。多くの方は「学生が関わると活動が盛り上がる」と感じている一方で、「大学生は4年間で卒業してしまうため、関わりが続きにくい」といった課題も抱えていました。そうした声を聞き、アクションポート横浜の皆さんが、「どうすれば継続的な関わりをつくれるのか」「学生と信頼関係を築くにはどうすればよいか」といった点を考えていることを知りました。この経験を通して、これまで自分が考えたことのなかった“大人と学生の関わり方”について深く学ぶことができました。

4．この体験を通して得たもの

体験を通して、「企画や運営に取り組む際にどのように行動すべきか」という点について、自分の中で大きく成長できたと感じています。これまでの私は、指示を受けてから動くことが多く、自分で調べたり、物事を深く考えたりすることがあまりありませんでした。しかし、エコツアーを成功させるためには、上からの指示を待つのではなく、自ら意見を出し、情報を整理して行動する“主体的な姿勢”が欠かせないことを学びました。また、企画を成功に導くためには、「いつまでに企画書を共有すべきか」「このスケジュールで間に合うのか」など、先を見据えて考える力も必要だと感じました。アクションポート横浜では、先輩方が企画に深く関わるのではなく、私たち短期インターン生が主体となり、必要な部分だけを的確にサポートしてくださいました。そのような環境の中で活動したことで、自分の視野が大きく広がり、主体的に動く力が身についたと感じています。

5．自己について発見できたこと

この経験を通して、自分は「人と関わるのが好きだ」ということに気づきました。大学では授業やレポートが中心で、どちらかといえば一人で完結する作業が多かったのですが、インターンでは「人と話す」「相談する」「意見を交換する」ことで、物事が前に進む感覚を得ることができました。特に、他の学生や職員の方との打ち合わせを通して、自分の考えが少しずつ形になっていく過程にワクワクしました。また、「完璧でなくてもまず行動すること」の大切さも学びました。以前の私は、失敗を恐れて行動が遅れがちでしたが、この経験を通して「まずはやってみよう」と前向きに行動できるようになりました。

6．今後取り組みたいこと

今現在、アクションポート横浜インターン生として、日本製紙連合会様と協力して行う「紙の未来 サステナユースワークショップ」という紙に関するプロジェクトと、野村不動産様と連携した中高生向けコミュニティルーム企画「きちじつ！まったりルーム」のプロジェクトに関わらせていただいています。今後は、これらの取り組みを含めたプロジェクトを進めていくことで、若者と地域の実践をより深くつなげる活動を展開していきたいと考えています。また、今回のインターン活動で学んだことを活かせるような活動を進めていきたいと思います。

．学生による活動報告

7．団体への提言

アクションポート横浜でのインターンは、学生にとって非常に貴重な学びの場でした。これまで私は、企画や運営はもちろん、社会活動に参加したことがなく、地域で学生が活躍していることも知りませんでした。今回の活動を通して、多くの大人の方々が学生の社会経験を支え、学生が活躍できる場をつくってくださっていることを知りました。その経験から、「自分にも何かできることがあるのではないか」という思いが一層強くなりました。アクションポート横浜の皆さまが、私たち短期インターンの活動を温かく見守り、支えてくださったこと、また多くの交流の機会を与えてくださったことに、心から感謝しています。このような貴重な経験の場をつくっていただき、本当にありがとうございました。

8．自己評価

今回のインターンを自己評価するなら、「挑戦の第一歩としては上出来」だと思います。自分の未熟さも痛感しましたが、それ以上に多くの学びと成長がありました。

特に、報告書の作成や SNS 発信など、形として残る成果を作れたことは大きな自信になりました。今後は、時間管理や優先順位の付け方など、実務面でも成長していきたいです。

NPO インターンシップ報告

NPO 法人ピッピ・親子サポートネット

文化表現学科 1 年

大学入学当初からインターンシップに関心があり、時間のある大学 1 年生の夏休みに活動したいと考えていました。語学学習やアルバイトなどやりたいことは多くありましたが、アルバイト以外の形で社会貢献したいと考え、NPO のインターンシップを探しました。将来の就職活動や社会経験に繋がることも期待していました。数ある団体の中で私が選んだのは、子育て支援を行う「ピッピ・親子サポートネット」さんです。以前から年下の子どもと遊ぶのが好きで、面倒を見る機会が多かったこと、また、小学校教諭に憧れがあり、学童保育などで経験を積みたいという思いがあったためです。ピッピさんの活動は学童保育だけでなく、保育園、一時預かり、デイサービス、フードシェアなど多岐にわたっており、これら全てを体験できるという点に魅力を感じました。

当初、インターンシップ全体の目標として、「周囲の状況を見て臨機応変に対応できるスキルを身につけること」を掲げました。しかし、インターン期間が短く、一つの事業所を訪問できたのが 2 回程度であったため、なかなか自分から積極的に行動に移すのは難しい状況でした。一方で、「周囲を見る」という行為は十分に実践できたと振り返ります。子どもたちは一人ひとり個性があり、全員が同じ遊びをするわけではありません。だからこそ、遊び方の違いやお友達との関わり方などを細かく観察する癖がついたと感じています。また、「笑顔を忘れず場を和やかにする」という目標も達成できました。知らない私にも子どもたちが少しでも心を開いてくれるよう、常に笑顔を絶やさないよう心がけました。受け入れ先の方からも「元気いっぱい笑顔が素敵」と言っていただけたことは大変嬉しかったです。子育て支援の側面では、「子どもたちに名前を覚えてもらうこと」を目標にしていました。実際、一緒に遊んでいる時に「田中さん！」と元気に声をかけてくれる子が多かったり、2 回目に会った時にはすぐに「遊んで！」と駆け寄ってくれる子がいたりしたため、この目標も達成できたと考えます。

この活動を通し、私は子どもを見守ることの難しさと子育て支援の必要性を改めて学びました。学童で遊んでいた際、ある子どもが椅子取りゲームをしたいと提案した時のことです。他の子もやりたがっている様子が見え、外が暑い中で少しでも運動になれば良いと考えました。しかし同時に、この遊びを望まない他の子どもたちへの影響を懸念しました。それまで一緒に過ごし、このグループは活発に遊ぶ子が多いと感じていたため、静かに絵描きをしたい子の邪魔になってしまわないか不安になったのです。結果としては、子どもの「やりたい」という意思を尊重しつつ、静かに遊んでいる子の様子も伺いながら実施しました。活動後の振り返りで、この時の判断について受け入れ先の方に尋ねると、「私たちもいつも悩む場面だ」と言われ、大変驚きました。いつも同じ子どもたちを見ているプロの方でさえ、判断に迷う瞬間があるのだということが理解できました。この経験や保育園の活動を通じて、子どもの見守りがいかに多くの配慮が必要であり、想像を超える大変さを伴うものであるか再認識しました。また、親子で過ごす広場にいた際、保護者の方と直接お話しする機会がありました。みなさんが口々

・学生による活動報告

に広場の存在のありがたさを語られました。特に夏場は、猛暑で外に出られる場所が限られるため、子どもたちにとってのびのびと遊べる貴重な場所であると同時に、親同士が孤立しないための重要な交流の場になっているとのことでした。さらに、他の市の方がこのような施設が少なく羨ましいという声も聞かれました。ここから、子育て中の親を孤立させず、子ども達がいつでも安心して成長できる環境を提供するためにも、子育て支援の輪を、より一層広く、強固なものにする必要があると感じました。

私はこのインターンで取り組んでみたいこととして「生の楽器の演奏を聴かせること」を提案しました。幼少期からのギター経験に加え、吹奏楽部や軽音楽部での経験から複数の楽器に触れていたため、自前のギターを持参し、簡単な曲を子どもたちに披露しました。すると、予想以上に子どもたちは強い関心を示し、真剣に演奏に耳を傾けてくれました。その後、「楽器に触ってみたい子？」と問いかけると、数名が集まってくれました。その子たちが不思議そうにしながらも楽しそうにギターに触れる姿を見て、少しでも音楽に興味を持ってくれたらいいなと思いました。それと同時に、私は「子どもたちが音楽を楽しんでいる姿を見ることが、自分にとって大きな喜びであり、楽しさなのだ」ということに気づきました。大学へは音楽をしたいという漠然な気持ちで入学しましたが、このインターンで私の将来が大きく変わりました。今後は子どもたちと音楽が触れ合える機会を提供できるような職業を探求し、目指していきたいと考えるようになりました。

私は生まれ育った地元で暮らしていますが、今回の経験を通じて、地元で行われている子育て支援や応援イベントについて、いかに自分が無知であったかに気づかされました。今後は、まず自身の地元における子育て支援策について深く調査し、インターン先である横浜市の事例と比較検討することで、より具体的な課題と可能性を見出したいと考えています。今回は「体験者」という立場でしたが、次は自らが「支援者」となり、地域社会に貢献していきたいという強い目標を持つことができました。地元で行われている子育て応援イベントがあれば、積極的に参加いたします。また、今回知ったフードバンクや、子ども食堂の運営など、少しでも参加可能な活動があれば、ボランティアとして貢献していきたいと考えています。優しく受け入れ、多くの学びの機会を与えてくださったピッピさんと、インターンの副題であった「ツナがるカンケイ」という素敵な出会いを提供してくださったプログラムに、心より感謝申し上げます。この出会いを決して無駄にはせず、これからも活動していきたいです。

この活動は、子育ての大変さと課題を再認識でき、自分の新たな可能性を知ることができました。体験終了後に行われた団体と参加者の合同報告会にて、団体の方からたいへん嬉しいご報告をいただきました。

「いまだに「また田中さん来てくれる？」と聞いてくる子どもがいるんですよ」

私自身、このインターンシップは多くの学びを得られた貴重な経験になったのは確かですが、活動を通じて子どもたちにとっても私との出会いが大切になっていたことがわかり、感無量でした。また、私が注いだ時間や関わりが、子どもたちの心にもしっかり届いていたことを知り、今後の活動への確かな手応えも得られました。この素晴らしい経験を忘れないように、そして次の参加者のためにも、多くの人に体験談を伝えていくのが役割だと思っています。

NPO インターンシップ報告

NPO 法人ピッピ・親子サポートネット

文化表現学科 1 年

私は以前からボランティア活動に関心を持っており、人のために何かをしたり、手助けをすることが好きでした。ボランティア活動は唯一私が、見返りを求めず自ら進んで行動することができました。人の笑顔を見ると自分も嬉しくなり、また、人の役に立てることで大きな幸せを感じられるのがボランティアの魅力だと考えています。そのような思いを持っていた中で、ボランティアセンターから紹介されたのが NPO 法人でのインターンシップでした。何を行うか迷っていましたが、私は子どもが非常に好きであったこと、また「共に育ち、共に暮らす」というピッピ・親子サポートさんの基本姿勢に強く惹かれ、参加を決意しました。

私は「子どもが大好き」という理由からピッピでのインターンシップに参加を決意しましたが、単に「子どもがかわいい」という自己満足で終わらせてはいけないと考え、このインターンシップを通して自分自身も成長し、今後に活かすことを目的としていました。具体的には、13 日間という短い期間の中で子どもたちと関わりながら日々感じたことや気づいたこと、反省点や良かった点などをできる限り見つけられるよう意識し、そのために子どもや保護者の方々と積極的に関わり、自ら行動する姿勢を大切にしました。また、子ども一人ひとりに寄り添い、安心して過ごせる居場所をつくることも大きな目標としました。

その結果、子どもたち一人ひとりとしっかり向き合い、全員と会話を交わすことができたほか、保護者の方々とも積極的に関わり、自分から行動する姿勢を持つことができました。これらは当初の目的に対して一定の成果を得られたと感じています。一方で、子どもの安全を十分に守りきれなかった場面もあり、瞬時の判断力や危険予測の力が不足していることを痛感しました。この反省を今後の課題とし、より安心できる環境づくりを実現できるよう努力していきたいと考えています。

インターンシップを始める前は、「子どもが好きだから関わってみたい」という気持ちが一番大きく、正直なところ楽しみと不安が半分ずつという状態でした。実際に活動してみると、子どもたちと触れ合う楽しさはもちろん、一人ひとりの個性や小さな成長に気づくことの大切さを強く実感しました。また、スタッフの方々や保護者の方々の温かさに触れる中で、子どもを支えるのは自分一人の力ではなく、地域や周囲の大人との連携があってこそ成り立つものであることも学びました。この経験を通じて、私は単に「子どもと関わる喜び」を得るだけでなく、その背景にある責任や配慮の重要性を理解できるようになりました。そして、自分自身もより主体的に行動する意識を持つことが、今後の成長に必ずつながると感じました。

このインターンシップを通して、私は自分自身についても新たな発見がありました。もともと子どもが好きという理由で参加しましたが、実際に活動してみると、子どもたちに寄り添うには想像以上に根気強さや柔軟さが必要であることに気づきました。初めは思い通りにいかない場面で戸惑うことも多くありましたが、その中で自分なりに工夫し、相手に合わせて行動を変えていく力が少しずつ身についてきたと感じています。また、子どもや保護者、スタッフ

の方々と積極的に関わる中で、自分は思っていた以上に人と関係を築くことが好きであり、その中でやりがいを感じられる人間だということも発見しました。一方で、とっさの判断や危険に対する注意力にはまだ課題があり、自分の弱点を明確に知る機会にもなりました。このように、強みと課題の両面を理解できたことは、今後の成長に大きく役立つと考えています。

今回のインターンシップを通して、私は「子どもが好きだから関わってみたい」という気持ちから一歩進み、子どもに寄り添うことの責任や配慮の大切さを強く学びました。活動の中で子ども一人ひとりの個性や小さな成長に気づき、その瞬間を共に喜ぶことができたことは大きな喜びでした。同時に、その成長を支えるためには周囲の大人との連携や安全面への配慮が不可欠であり、自分の判断力や観察力を磨いていく必要があることも実感しました。また、毎日の振り返りを通して、自分の行動を客観的に見つめ直し、改善点や良かった点を整理し、次に活かす習慣を持てたことは、今後の自分の成長にとって大きな財産となりました。さらに、子どもや保護者の方々、スタッフの方々と積極的に関わる中で、自分は人とつながりを築き、その中でやりがいを見いだせる人間であるという自己発見もありました。一方で、瞬時の判断や危険予測といった課題も明確になり、まだまだ成長の余地があると感じています。

この経験を踏まえて私が伝えたいのは、ボランティア活動は「人のため」だけでなく「自分の成長のため」にもなるということです。子どもたちの笑顔や成長を支える過程で、自分自身も学び、成長していける。そしてその経験は将来、社会の中で誰かを支える力となるはずです。ボランティアは一方的な奉仕ではなく、互いに育ち合う関わりであることを、この13日間で強く感じました。今後は、この経験で得た学びを自分だけのものにせず、周囲の人にも伝えていきたいと思います。例えば、同じようにボランティアに関心を持つ人に対して「勇気を出して一歩踏み出すことの大切さ」や「子どもに関わることのやりがい」を伝えたいです。また、将来の進路においても、この経験を基盤にしながら「人に寄り添い安心できる場をつくる」という視点を持ち続けていきたいと考えています。

今回、ピッピーでのインターンシップを通して多くの学びと成長の機会をいただきました。まず初めに、このような貴重な経験の場を提供してくださったことに心より感謝いたします。そのうえで、今後さらに活動が充実し、より多くの人にとって有意義な場となるために、いくつかの提言をさせていただきます。

一つ目は、活動後の振り返りの場の共有化です。私は毎日、自分なりに活動の反省や学びを振り返っていましたが、スタッフの方や他の参加者と一緒に共有できる時間があれば、互いの気づきを交換し合うことができ、学びの幅がさらに広がると感じました。

二つ目は、保護者や地域の方との交流機会の拡充です。活動を通して保護者の方々と話す機会はありませんでしたが、もう少し体系的に交流できる時間や場があれば、子どもを取り巻く環境をより深く理解し、保護者の方々の思いやニーズも把握できるのではないかと思います。

三つ目は、安全対応に関する事前研修の強化です。私は活動の中で子どもの安全を守りきれなかったと反省する場面がありました。特に子どもと接する活動においては危険予測や緊急時の対応が非常に重要であるため、参加前に具体的な事例をもとにした研修やシミュレーションがあれば、より安心して活動できるのではないかと考えます。これらの提言は、すでに充実している活動をさらに発展させるためのものであり、今後の取り組みに少しでも参考になれば幸

．学生による活動報告

いです。

今回のインターンシップを通じて、自分自身の成長や課題を改めて見つめ直すことができました。子どもと関わる場面では、思った以上に臨機応変さや観察力が求められることを実感しました。相手の気持ちや反応を意識しながら関わることで、自分の伝え方や接し方を工夫する力が少しずつついたと思います。一方で、自分の気持ちや考えを即座に表現することにはまだ難しさを感じました。今後は経験を重ね、言葉や行動でより安心感を与えられるよう努力していきたいです。また、子どもたちから学ぶことが多く、自分自身が刺激を受け成長できる機会でもありました。今回の経験を通じて得た気づきを、これからの学びや将来の活動に活かしていきたいと思います。

NPO インターンシップ報告

片倉うさぎ山プレイパークでのインターンを終えて

コミュニケーション学科3年

二度目のインターンに参加したきっかけ

私は、大学一年生の時に NPO インターンシップに一度参加したのですが、新しい活動先でまた挑戦してみたいと思い、参加を決めました。前回活動したインターン先では、自分たちで企画を実行したり、様々な NPO 団体や行政と関わることでできたりする活動が主軸となっていました。私は型にはまって行動することが得意だと思っているのですが、それとは対照的に柔軟かつ自分のやりたいように動くことに苦手意識がありました。自由な発想が求められるプレイパークで活動を行うことで、苦手意識の克服やまた違った経験ができるのではないかと思います、インターン先を片倉うさぎ山プレイパークに決めました。

インターン先についてと活動内容

今回インターン先となったのは「片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員会」です。水曜木曜週末の週四日だけ、公園の一部がプレイパークとして使用できるようになります。とても小さい空間ではありますが、大きな高台があったり、おままごとやけん玉ができたり、夏は水遊びを行ったりできます。イベントも行っており、ベーゴマ大会や野外映画会、保護者の方がママ友づくりにつながるような交流ができることも大きな特徴です。プレイパークの管理運営を行っているのが、片倉うさぎ山公園あそび場管理運営委員会であり、プレイリーダーと呼ばれる大人が駐在し、訪れた子どもたちの遊びの幅を広げたり、危険がないか見守ったりしています。

インターン期間中に行った活動内容はとてもシンプルでした。当日にプレイパークに来て、10時から17時の間パーク内で自由に遊ぶことです。私の苦手とする柔軟かつ自分のやりたいように動くこと、そのものです。「自由に遊ぶ」というのは時に簡単で、時に難しく感じました。初めてプレイパークを訪れた子どもに優しく遊び方を提案してみたり、かけっこに誘われたから一緒に走ってみたり、保護者の方に話を聞いてみたり、真夏の活動なので適宜休憩を取って遊びを断ったり。断るという選択が入るのも自由に遊ぶということだと学びました。子どもたちと本当に対等な関係を築くこと、プレイパーク内で呼ばれるプレイネーム（プレイリーダーやボランティアに付けられるあだ名のこと）もその一例なのかもしれなとも感じました。私がインターン期間中によく考え、学んだのはこの子どもたちと本当に対等な関係を築くことでした。

子どもたちのやりたいことを尊重するとは

インターンの担当をしてくださったプレイリーダーは、「うさぎ山では子どもたちのやりたいことを尊重することを一番大切にしている」と話してくれました。例えば、子どもたちが火や刃物を使用したい、高台に上りたいといった場合、私たちが大人の視点から「それは危ない

・学生による活動報告

からやめよう」と止めることは、子どもたちのやりたいことを尊重していることになりません。怪我をさせてでも一度経験させてみる、答えを渡すのではなく方法を提案してみる、というように子どもたちに選択させることが大切だと学びました。初日に説明されたときは理解できたのですが、活動するうちについ手を出してしまったり、「危ないからやめよう」と言いかけたり、無意識に子どもたちの思考の幅を狭めてしまっていることに気が付きました。

ケンカしてしまった子どもたちの仲裁はどこまですべきなのか、言語コミュニケーションがまだ拙い年齢の子ども同士がおもちゃの取り合いをしたときに母親同士が止めてしまい、そこにどうアプローチをかけたらよかったのか。考えすぎてしまう課題も多くありました。後者にあげた母親同士が止めてしまった出来事を相談したとき、「初めてここに来るお母さんたちはだいたいそうになってしまうから、子どもたち同士に取り合いさせていいんですよってことを伝えるようにしてる」と教えてくれました。プレイリーダーが、常に子どもたちの思考の自由を広げたり、言語コミュニケーションが使用できない子どもたちを発言できない、分からないからで終わらずに、意思を持った一人の人として対等に扱う姿に刺激を受けました。当たり前のように、実践的にはできていないことに気づかされる日々でした。

「片倉うさぎ山プレイパーク」の特徴

ほかのプレイパークとは異なる特徴が、片倉うさぎ山プレイパークにはあると思います。プレイパークは親子連れや子どもたちだけではなく、様々な人が訪れるコミュニティスペースであると感じました。子どもの年齢自体も様々ですが、子どもたちに遊びを提供したいと思う大人もふらっと訪れることが分かり、地域のコミュニティスペースとして機能していることが分かりました。時々、遊びの達人のような大人がいて、複雑な折り方のコマの折り方や竹とんぼをくれたり、ベーゴマで対決してくれたり、大学生の私でもわくわくしましたが、ふらっと訪れた近所のスペースにこんな大人がいてくれたら子どもたちにとっては余計に嬉しいのではないかと思います。プレイパークと聞くと小さな子どもたちと遊ぶという印象が強いように感じていたので、活動を終えてから多様な方と、遊びとプレイパークという場所を通してつながることができたのはとても面白かったと感じました。

プレイパーク内は緑にあふれていて、自然の中で土で汚れたり虫に刺されたりしながら遊ぶ子どもたちがいます。みなとみらいといった都会的なイメージの強い横浜ですが、都心とは異なる自然にあふれた一面を見ることができ、地方出身の私はそれがとても嬉しかったです。公園がなくなったり、規制がかかったりしている中で子どもたちが制限なく遊ぶことのできる場所が、まだ都心にも存在していることがまず素晴らしいと思いました。

印象的だった出来事

今回のインターンでは、短期という短い間とは思えないほど濃く、印象的な出来事がたくさんありました。私の気づきや成長につながったこともたくさんあるので、一部紹介したいと思います。

まず、水遊びを通して、私が子どもの行動の幅を広げることに成功したことについてです。インターンのたびに顔を合わせていたので顔見知りになった2、3歳の女の子が、実は顔を水

・学生による活動報告

につけるのが苦手だと保護者の方に聞きました。その日は暑かったので上から降らすミストを設置しており、苦手ならその下で遊ぶのをやめようかと提案しようか迷いました。しかし、「でも水に慣れさせたいんだよね」と保護者の方がこぼしたので、少しでも水に慣れるように工夫してみることにしました。私がミストの下で、手を屋根のようにして水が当たらない空間を作りました。そしてその子を呼んでみると、すぐに来てくれて徐々に屋根がなくても水で遊んでくれるようになりました。考えずに遊びをやめる決断をせずに可能性を広げる手伝いできたのはとても嬉しかったです。

次に、夏のイベントとして開催された野外映画会についてです。プレイパークは通常 17 時までですが、この日は日が落ちた 18 時から、プレイパーク内に大きな布をつるして映画を投影する野外映画会が行われました。プレイリーダーと一緒にプレイパークの管理運営を手伝う世話人の皆さんを中心にカレーも作られ、夜の公園でたくさんの人が集まってカレーを食べ、映画を視聴しました。ブルーシートの下に座り、辺りは自動車の音が一切なく、明かりもなく、薄明りの虫の声が聞こえる中でした。私は地元の風景を思い出しましたし、横浜でこんなに自然的で、多種多様な人が集まる穏やかな時間が生まれるものなのかと感激しました。子どもたちが大人になっても覚えているような思い出になるのだらうと感じましたし、そういった経験を大人がいくつ経験させてあげられるだらうかということを改めて考えるきっかけにもなりました。私自身もこんな非日常的な体験はそうそうできることではないと思うので、素敵な時間を過ごさせていただいたと感じています。

インターンを通して

片倉うさぎ山プレイパークでのインターンを通して、私はとても心の持ちようが柔らかくなったと感じています。以前は張り詰めたような気持ちで過ごすことが多かったと思うのですが、子どもたちへの接し方や彼女らの可能性をどう広げてあげることができるのかを考える練習をするうちに自分に対しても優しくそう考えることができるようになってきたと思います。無邪気で恐れを知らず、常にチャレンジングな子どもたちの姿にも感化されました。また、プレイリーダーの方から「人間だから得意不得意があるし、遊びたくない気分の時もある。断ってもいい」というふうに何度も教えてもらい、本当にそう感じられるようになりました。子どもたちは決してお客様ではなく、私たちもイエスマンではありません。素直に、対等に接することが誰かと距離を縮める近道であり、自分らしく活動が続けられる鍵なのだと学びました。

国際機関実務体験プログラム報告 横浜市国際交流協会（YOKE）（春期）

国際社会学科 1 年

1．はじめに

私はボランティアセンターの推薦を通じて、横浜国際交流協会 2025 年度春の実務体験プログラムに参加させていただいた。本報告書では、2 か月間のインターンシップ活動について報告する。まず応募動機について述べ、次に実務体験を通じて得られた成果を整理する。さらに、今後どのようにこの経験を生かしていきたいかについて述べ、最後に参加団体への提言および自己評価を行う。

2．実務体験希望の背景

私は日本に来てから、多くの外国人の友人と出会い、交流を深める中で異文化に強い興味を持つようになった。中でも最も印象に残っているのは、来日当初に出会ったアルバイト先の上司の存在である。日本に来たばかりの私は日本語がほとんど話せず、未熟であったが、その上司は私に対して娘のように接し、日本のルールや日本語の使い方、文章の書き方、さらには人生に対する考え方で丁寧に教えてくれた。

この経験を通じて、異文化交流は単なる友人関係にとどまらず、言語や文化の違いを越えて家族のような深い関係を築くことができるものだ実感した。特に印象に残っている言葉は、「考えすぎるのではなく、行動しなければ成果にはつながらない」というものである。現在、その上司と会うことはできないが、「行動力がある」と言われるたびにその言葉を思い出し、自分の中で大きな支えとなっている。

このような経験から、異文化交流の素晴らしさを実感し、それを多くの人に伝えたいと考ええるようになった。そのため、異文化社会の中で積極的に行動したいという思いが強まり、さまざまな国際交流活動に挑戦してきた。その過程で、将来は国際関係に関わる仕事に就きたいと考えるようになった。

以上の理由から、本プログラムへの参加を希望した。本実務体験を通じて、国際交流の現場について理解を深めるとともに、社会人としての基礎的な能力を身につけたいと考えた。

3．実務体験で得られた成果

（１）国際交流分野に対する理解の深化

本実務体験を通じて、国際交流機関と国際機関の役割の違いについて理解を深めることができた。国際機関は、国家間の協力を通じて地球規模の課題解決に取り組む組織であり、一方で国際交流機関は、人と人とのつながりを通じて相互理解を促進する役割を担っている。

今回の研修では、国連世界食糧計画（WFP）国際農業開発基金（IFAD）国際協力機構（JICA）などを訪問し、世界が抱える多様な課題について学ぶ機会を得た。貧困や紛争といった広く知られている問題に加え、例えば食糧支援のための資金が年々減少していることに

・ 学生による活動報告

より、支援活動の継続が困難になりつつある現状など、普段あまり意識されない課題についても理解を深めることができた。また、JICA が開発途上国の経済・社会発展のために実施している技術研修員の受け入れや海外協力隊の派遣、資金協力などの取り組みについても学んだ。さらに、東日本大震災の際には、経済的に厳しい国々からも日本に対して支援が寄せられたことを知り、国際協力が双方向的なものであることを実感した。

一方で、横浜市における国際交流ラウンジの訪問を通じて、地域社会に根ざした国際交流の実態にも触れることができた。訪問した鶴見国際交流ラウンジ、なか国際交流ラウンジ、みなみ市民活動・多文化共生ラウンジでは、それぞれ異なる特徴を持つ活動が展開されていた。なか国際交流ラウンジでは、外国につながる若者への支援や区役所と連携した生活支援が行われており、鶴見国際交流ラウンジでは多言語対応を強みとし、特に南米や東南アジア出身の住民への支援や親子向けの活動が充実していた。また、みなみ市民活動・多文化共生ラウンジでは、市民活動と多文化共生を組み合わせた取り組みが行われていた。

これらの経験から、国際協力は単に国際機関による大規模な支援にとどまらず、地域レベルにおける人々の交流や支援活動によっても支えられていることを理解した。従来は国際的な業務といえば国際機関での活動を想定していたが、実際には地域社会に密着した国際交流機関の存在とその重要性を認識することができた。このような理解は、今後自身の進路を考える上で重要な示唆を与えるものであった。

(2) 自己理解の深化

本実務体験を通じて、自身に対する理解をより一層深めることができた。特に、語学力、なかでも英語によるコミュニケーション能力の不足が大きな課題として明確になった。外国人対応の場面において、十分な意思疎通が図れなかった経験は、自身の能力の限界を実感させるとともに、今後の学習の必要性を強く認識させる契機となった。

国際交流ラウンジでの活動では、来日間もない外国人が多く、日本語でのコミュニケーションが困難な場面が多々あった。そのような状況において、自分が英語や中国語を十分に運用できていれば、より円滑な支援が可能であったと感じた。この経験は、語学力の向上が国際交流分野で活動する上で不可欠であることを具体的に示すものであった。

また、実務面においては、情報の整理・調整力の不足も課題として認識された。ミーティング時の記録作成や、参加した活動に関する資料の管理などにおいて、自身の対応が十分でないと感じる場面があり、今後改善すべき点として明確になった。

一方で、自己の強みについても確認することができた。グループ活動を通じて、自らの意見を発信する力や、状況に応じて柔軟に対応する力が備わっていることを実感した。また、これまでの国際的な環境の中で培われた経験により、国と国との距離を過度に意識することなく、「既知の文化」と「未知の文化」という視点で物事を捉えることができる点は、国際交流の分野において有効な資質であると考えられる。これらの気づきは、自身の適性を再認識する重要な機会となった。

．学生による活動報告

（３）実務的スキルの向上

本実務体験において、実務的なスキルの向上も重要な成果の一つであった。特に、プレゼンテーション能力の向上が挙げられる。中間発表および最終発表を通じて、情報の取捨選択の重要性や、限られた時間内で効果的に内容を伝えるための構成力について学ぶことができた。これにより、発表内容の論理性や分かりやすさを意識した資料作成および説明が可能となった。

また、日本語能力の向上も実感することができた。実際の業務場面において、専門的な語彙や敬語表現に日常的に触れることで、教室内の学習だけでは得られない実践的な言語運用能力を身につけることができた。このような経験は、今後日本で活動する上での基盤強化につながるものである。

（４）人的ネットワークの形成

本プログラムへの参加を通じて、人的ネットワークの重要性についても理解を深めることができた。個人として行動することも可能ではあるが、ネットワークが広がることで相互に支え合いながら成長し、より大きな目標に向かって進むことができるという認識を得た。

特に、同様の関心や目標を持つ参加者との関係構築は大きな成果であった。多様な背景を持つ仲間との交流を通じて、新たな視点や価値観に触れることができ、自身の視野を広げることに繋がった。また、こうした人間関係は学習意欲の向上を促すとともに、将来の目標をより具体的に描く上でも重要な要素となった。

以上のように、本プログラムで得られた人的つながりは、今後の学習およびキャリア形成において大きな財産となるものである。

４．実務体験を踏まえた今後の計画

本実務体験を踏まえ、今後は主に三つの計画を実行していきたい。

第一に、国際交流に関する知識と視野のさらなる拡大である。大学においては、国際開発論や英語で学ぶ国際政治などの科目を履修し、国際協力に対する理論的理解を一層深めていく。また、学外においても国際交流活動に積極的に参加し、多様な背景を持つ人々と関わることで、実践的な視野の拡張を図りたい。理論と実践の双方から学びを積み重ねることで、より多角的に国際問題を捉える力を養うことを目指す。

第二に、語学力の向上である。本実務体験を通じて、語学力が円滑なコミュニケーションの基盤であることを強く実感した。今後は英語学習を中心に据えつつ、中国語の習得にも継続的に取り組む。また、日本での活動を視野に入れ、日本語のビジネス表現や自然な会話能力の向上にも努めていく。これら三言語の能力をバランスよく高めることで、多様な人々と円滑かつ効果的に意思疎通を図ることができる人材となることを目標とする。

第三に、人とのつながりを広げ、多文化共生の実現に貢献することである。本実務体験を通じて、多文化共生の重要性と異文化が交わることの価値を実感した。この経験を社会に還元する一歩として、インターン生同士で異文化交流を目的としたインカレサークルの立ち上げを行った。

．学生による活動報告

現在、多くの大学において日本人学生と留学生の交流機会は十分とは言えず、相互に関わる機会が限られているという課題が存在する。留学生からは、日本人と自然な日本語で会話する機会が少ないという声も多く聞かれる。このような状況を踏まえ、本サークルでは、留学生には日本文化や日本語に触れる機会を、日本人学生には異文化に触れる機会を提供することで、双方向の理解促進を図っていきたいと考えている。

以上の三点を軸として、知識・語学・実践の各側面から自己成長を図るとともに、将来的には国際交流および多文化共生の分野において主体的に貢献できる人材となることを目指す。

5．まとめ（自己評価と提言）

本インターンシップを通じて、私は国際交流の現場に対する理解を深めるとともに、自身の強みと課題を明確にすることができた。特に、主体的に行動することの重要性や、人との関わりの中で成長することの意義を改めて実感した。一方で、語学力の不足など、今後克服すべき課題も明らかになった。これらの課題に真摯に向き合い、継続的に努力していく必要があると考えている。

最後に、本プログラムに関わってくださった職員の皆様および関係者の方々に深く感謝申し上げます。今後は本実務体験で得た学びを生かし、国際交流の分野で社会に貢献できる人材へと成長していきたい。

森ノオトでのインターン活動について

GREEN × EXPO2027 公式 SNS 記事の執筆と学生ライタープロジェクトの運営

コミュニケーション学科3年

活動のきっかけと活動概要について

大学1年時に NPO インターンをしていたアクションポート横浜から、今回の活動の紹介を受け、認定 NPO 法人森ノオトでのインターンを始めました。森ノオトは青葉区を拠点に活動するローカルメディア NPO 団体です。私と同じようにボランティア経験のある学生3人が、学生ライタープロジェクトの運営メンバーとなり、森ノオトのインターン生として関わることになりました。

この学生ライタープロジェクトは、GREEN × EXPO2027 の公式 SNS に載せられる記事「#みどりなひと」の取材・執筆を大学生が実際に行うプロジェクトのことです。2025年9月から2026年2月にかけて、横浜市周辺でみどりの活動をしている市民団体を学生スタッフ・学生ライターが取材しました。若い世代に GREEN × EXPO への興味を持ってもらい、認知を広げることを目的とし、森ノオトのサポートのもと、全部で9本の記事を制作しました。運営メンバーである学生スタッフは、2025年5月から2026年3月の間、プロジェクトの運営から取材に至るまで活動を行いました。

学生スタッフについて

2025年5月から2026年3月の10か月の間、私は学生スタッフとして活動を行いました。毎週1回の活動（森ノオトの事務所、全体のオンラインミーティング、学生ミーティングのどれか）を主軸に活動しました。共に活動したのは、フェリス女学院大学3年生と、東海大学2年生です。2人とも NPO 団体での活動やボランティア活動の経験があり、チームとして活動したり、地域に携わって活動することに慣れているメンバーです。加えて3人の得意不得意がそれぞれ異なっていたため、バランスが良く、お互いに補い合いながら活動していくことができ、居心地の良さを常に感じていました。初対面の学生ライター達と日程調整と取材の準備から始め、取材を行い、記事を執筆、森ノオトスタッフが校正し、推敲を重ねるという何度もやり取りをするこの作業を抱えながら、プロジェクトを先へと進めていくためには、この居心地の良さ、「活動しやすさ」がなければ、走り切ることはできなかったと思っています。

学生スタッフとしての10か月の活動の流れ

私たちはまず、5月にプロジェクトの骨組みづくりを始めました。どのような大学生にこの活動に参加してほしいのか学生スタッフと学生ライターがどう関わって取材活動を行うのがいいのかなどを検討し、学生ライター募集のためのオンライン説明会の実施や取材までの事前準備、取材チームの提案などを行いました。9月～翌年2月の間の活動で、2か月に一度取材を行う方法を取り、学生スタッフをリーダーとした3チームが取材先ごとに並行して動くチー

．学生による活動報告

ム形態が良いのではないかと検討しました。

また、学生ライターの募集にあたって、「興味を持った学生がどうしたら一歩踏み出せるか」を重視し、学生が時間を取りやすい夜の時間帯に設定したオンライン説明会の実施、活動期間の選択できる参加形式、他大学の学生と関わることでできるチーム体制での活動など、参加へのハードルを下げる工夫を行いました。

7～8月に学生ライターの募集を開始し、オンライン説明会の実施、募集の締め切りを行いました。説明会には10名の参加があり、最終的には7名の学生ライターが参加することになりました。9月には学生ライター向けの研修会を行い、さっそく1回目の取材を行い、11月にはその振り返りを行うオンライン会議も行いました。並行して2回目の取材準備も行っていましたが、学生ライターは日程が合わず、2回目の取材は学生スタッフが個人で行うこととなりました。日程調整の難しさは、大学生ゆえの課題であると改めて感じました。学生ライターとは取材以外の活動で対面であることがないため、交流の場としてご飯会も企画しましたが、そちらも日程調整がうまくいかず中止になってしまいました。1～2月には最後の取材を行い、3月にプロジェクトの成果報告会を行いました。

印象強く残った活動：オンライン説明会について

私はこのオンライン説明会に至るまでの期間が特に印象深く残っています。オンライン説明会の実施は共に活動した学生スタッフ1人の提案で実施が決まりました。この説明会があったことで、学生ライターも参加する前にプロジェクトの概要や規模間、活動頻度などをつかめ、9月からの活動もスムーズに行うことができたと考えられます。他の学生スタッフのこういったアイデア力には助けられることばかりでした。

しかし、当時はこのオンライン説明会の実施が決定してから広報を開始するまで3週間もありませんでした。今回のプロジェクトの広報を行う際は、最終的に国際園芸博協会のチェックも必要になります。作成、森ノオトでのチェック、園芸博協会のチェック、そして、修正という流れを考えると全く時間がありませんでした。また、チラシだけではなく、説明会とプロジェクトに関する詳しい概要と、申し込みフォームを記載した広報記事（森ノオトの各種SNSに掲載）の執筆も行う必要がありました。自分たちも活動の概容をようやくつかめたタイミングで、これから参加してもらう学生ライターの目星や活動形態を決定し、広報内容を確定するのはとても難しかったと感じます。同時に最終的には7名の学生ライターの参加につながったので、とても達成感のある期間だったと感じます。この時に決めた大学生は人によってスケジュールが異なるため、「活動期間を選択できる」、「取材に行ける日時の取材に参加する」という点は後々とても生きてきました。同じ学生だからこそその視点を活かすことができたと感じます。

全体を通した課題：チームビルディングの難しさ

このプロジェクトを通して私が感じた課題はチームビルディングの難しさです。前述したように、学生スタッフ同士のコミュニケーションや活動に関しては問題が全くありませんでした。しかし、初対面かつNPOやボランティア活動経験のない学生ライター達とのコミュニケ

・学生による活動報告

ーションには温度差を感じてしまったり、思うようにいかなかったりする瞬間が何度ありました。例えば、オンラインでのミーティングの際に学生ライターに画面や音声をオフにされてしまい、私の説明や意見に対する反応が見えづらくやりづらさを感じてしまいました。オフにしたい気持ちもわかるので許容してしまいましたが、結果として運営を行う自分の負担になってしまいました。また、日程調整の面でも苦戦しました。頻度が高くなく、対面で会ったことのない学生との活動は優先順位がどうしても低くなりがちなようで、ミーティングや交流会として企画したご飯会の日程が決まるのに時間がかかりました。反応速度も学生スタッフ間と比較してしまっていました。

そんな活動の中で、私が大切にしていた言葉があります。活動が始まって、学生ライターとチームを組んで取材をすることが決まった際に森ノオトスタッフの方から言っていた「みんなはできる人だから1人でやった方が早いことの方が多いと思うけど、これからは1人でやることをあえてチームでやるようになる。負担に感じずにチームでやることの意義を感じられるといいね」という言葉です。「あえてチームでやること」の意義を常に念頭に置いていたからこそ、腐らずに活動を続けてこれたのかと思います。

取材ごとに学生スタッフと森ノオトスタッフの間で振り返りを重ね、リマインドを徹底する、学生スタッフは遠慮せずにリーダーシップを出すなど、学生ライターとのコミュニケーションが円滑になる工夫を考え、実践しました。

学生ライタープロジェクトを通して見えたもの

活動前は、GREEN×EXPO について知識もなく、横浜にみどりの活動があるというイメージすらありませんでした。このライタープロジェクトを通して、様々な年代や場所でみどりの活動を行う方々に関わることができ、とても刺激になりました。横浜はみなとみらいの都会的なイメージが強いですが、みどりにあふれ、都会的な部分と共存している場所であるということがもっと多くの人に伝えられたらいいと感じました。また、取材先の人たちとGREEN×EXPO の意義を共有、当事者意識を共に持つこともできたのではないかと感じます。取材を受け、記事になることで取材対象になった方はもちろん、その周辺の方にも認知度が広がっていくことになります。私自身も取材に行ったり、駅ナカで広告が出ている時に自分の身近な人との会話になったりし、自分事として捉えるきっかけになっていたので、取材に関わった人もそうではないかと感じています。GREEN×EXPO を若者に知ってもらい、未来の世代が環境や自然への関心を持つきっかけにするというプロジェクトの目的の達成にもつながったと感じます。

そして、最後に活動について簡単にまとめたいと思います。長い期間での活動だったため、目の前にあることをこなすのに必死でしたが、今振り返ってとても濃く、充実した日々を過ごさせていただいたのだと思っています。一緒に活動出来た二人には感謝してもしきれませんが、学生の活動しやすい環境を常に作ってくださった森ノオトスタッフの皆さんにも感謝がありません。皆さんからもらった温かいフィードバックの言葉を自信に、これからも自分の活動を頑張っていきたいと思います。

海外ボランティア ボルネオ島 インターン留学

国際交流研究科 国際交流専攻 1 年

1．この活動を通してどのような社会課題に取り組もうとしましたか？

農村に暮らす子どもたちの教育や栄養の課題、マレーシアで深刻化している環境問題に目を向け、地域や社会全体とどう関わっているのかについて取り組もうとしました。

理由として、昨年同じボランティアに参加した際に、教育や栄養が子どもたちの将来に直結していること、環境問題が地域の暮らしだけでなく、子どもたちやその土地の未来に大きく影響していることを実感したからです。

2．取り組み内容

この活動を通じて、児童養護施設で暮らす児童の福祉サポートや施設運営に関わる様々な活動に取り組みました。具体的には、子どもたちの生活や学習をサポートする活動に加え、施設内の家庭菜園で農業を行い、食材の自給につながる活動をしました。また、施設に貯水タンクを設置するための準備として、斜面に面する場所に煉瓦の壁を作る活動にも取り組みました。

3．取り組み成果

今回の活動では、子どもたちの生活や学習を支援し、また家庭菜園での農業活動や貯水タンク設置に向けた基盤づくりに携わることで、教育や環境改善の一助となる成果を得ることができました。子どもたちが学習に意欲を示す姿や、収穫した作物が食事につながる様子を見て、支援が子どもたちの成長や生活の質に直結していることを実感しました。さらに、貯水タンク設置の準備は、将来の水資源確保につながる重要な成果だと考えています。短期間の取り組みであり課題は残るものの、今回の活動を通じて設定した目的に対して大きな手応えを得ることができたと考えています。

4．活動を行っての感想

今回の活動を通して、私は農村に暮らす子どもたちの教育や栄養、そしてマレーシアで進行している環境問題について、現場で直接学び、理解を深めることを目的としていました。児童の福祉サポートや施設内の家庭菜園での農業、貯水タンク設置に向けた斜面での煉瓦壁作りなどを行いました。活動中には、困難に直面する場面も多くありましたが、現地のスタッフのサポートや子どもたち自身の明るく前向きな姿に支えられ、困難を乗り越えることができました。

活動を通して、私は単に子どもたちの生活を支えるサポートをするだけでなく、子どもたちから多くを学ぶ経験しました。彼らの好奇心や笑顔、学びに向かう姿勢から、人との関わり方や日々の小さな努力の大切さを改めて実感しました。また、家庭菜園での作業や水の確

・学生による活動報告

保に向けた基盤づくりなど、環境改善に関わる活動を通じて、地域の暮らしやその未来に直結する課題に対する理解も深められました。

この活動で得た経験は、単なるボランティア体験にとどまらず、教育や環境保全の重要性を実感することができ、社会課題に主体的に取り組む姿勢を養う貴重な機会となったと考えています。今後も、現地で学んだことを活かし、子どもたちの未来や地域の持続可能な発展に貢献できる取り組みを考え続けていきたいと強く感じています。

教育活動の現場から学ぶ国際協力の現状と展望

国際社会学科 1 年

今回のボランティア活動に参加した理由は多層的であるが、その背景には、私自身がかねてより国際協力や異文化理解に強い関心を抱き、将来的にその分野の研究や国際機関でのキャリアを志望しているという動機が存在する。大学で国際協力論や東アジアの近現代史を学ぶ中で、国家間の地域的課題、市民社会の役割などを理解する一方で、こうした学びがしばしば「抽象的な知識」にとどまることに不安を抱いていた。知識を知識として学ぶだけではなく、実際に現場に身を置き、人々と直接関わり、異文化的な環境で活動する経験こそが、今後自分が歩むべき進路を明確にし、学問的関心を深化させるうえで不可欠だと考えたのである。

特に、私はアジア地域の発展や市民社会が果たす役割に関心を寄せてきた。アジアには急速な経済成長を遂げる国々がある一方で、貧困、教育格差、民族間の緊張といった課題も多く存在している。こうした現実をただ遠くから学ぶだけでなく、自ら現地に赴いて人々と関わることで、机上の学問だけでは決して得られない「実感を伴う理解」を築きたいと考えた。また、自分自身の力が社会の中でどの程度通用するのか、理想と現実の間に横たわる溝をどのように埋められるのかを試したいという思いも、参加を決意する大きな契機となった。言い換えれば、この活動は一過性の体験ではなく、自分の進路や研究の方向性を見極めるうえで極めて重要な試金石であったのである。

当初の目的は大きく三点あった。第一に、現地の人々と積極的に交流し、異なる文化的背景や価値観を持つ人々の考え方や生活様式を直接理解することである。これまでも異文化理解という概念は学び、経験してきたが、それは観光と短期留学という側面からであり、ボランティア活動等から得られる人間関係にどう反映されるのかを知る機会は少なかった。ボランティア活動現場での交流を通じてこそ、自分がどの程度柔軟に異文化に対応できるのかが明らかになると考えた。第二に、現地の教育現場を観察し、教育支援が具体的にどのような形で行われているのかを学ぶことである。特に、日本の教育制度や協力のあり方と比較することで、教育の普遍性と地域性の双方を考察する視点を養いたいと思った。第三に、自分自身の特性や限界を知ることである。新しい環境に置かれたときにどのように適応し、どのように課題を克服するのかを見つめ直すことは、将来、研究や国際機関に携わりたいと考えている私としての成長に不可欠だと考えた。

実際の活動を通じて、私はこれらの目的が一定程度達成されたと感じている。特に教育現場での観察は、理論と実践の間に横たわる大きな隔たりを強く意識させる経験となった。たとえば、教育を支援する仕組みは整っているはずであるにもかかわらず、教材の不足や指導方針の不統一といった現実的な問題が存在しており、理念と現場の状況が必ずしも一致しないことを学んだ。このような状況は、学術的な知識を現実の社会課題にどう橋渡しするのかという課題を改めて突きつけるものであった。

特に印象的だったのは、教育活動のあり方に関する問題である。参加先の教育センターは十

年以上にわたる活動実績を持っていたが、その長い歴史にもかかわらず教育内容が体系的に確立されていないという現実を知った。指導法や教材が標準化されていないため、一週間で入れ替わる担当者によって進め方が大きく異なり、学習者にとっての教育体験は断片的で一貫性を欠いていた。また、数多くのボランティアがこれまでに関わってきたはずであるのに、その経験や知見が組織として蓄積され、後続の人々に引き継がれる仕組みが存在しない点も深刻に感じられた。これは、現地の子どもたちにとって教育効果を限定的なものとし、支援活動そのものの持続可能性を脅かす要因になりかねない。外部からの支援が絶え間なく続いているにもかかわらず、標準化や改善が進まない現状を目の当たりにし、私は「ボランティア活動は本当に持続可能な変化を生み出せているのか」という根本的な問いを突き付けられた。

この経験を通して得られた学びは数多い。第一に、理想と現実のギャップを直視する勇気を持つことの重要性を理解した。教育支援は「良いこと」を行えば自動的に成果が得られるものではなく、社会的・制度的な制約に直面することが多い。短期的な熱意だけでなく、長期的視野と継続的な改善の仕組みが不可欠であることを痛感した。第二に、自分が「与える側」であると同時に「学ぶ側」であるという認識を強く持てた点である。現地の子どもたちやスタッフとの関わりを通じて、自分の未熟さや思い込みに気づかされ、むしろ学びを享受する存在であると自覚した。第三に、国際協力の現場では一人の力に限界がある一方で、他者と協働することで初めて大きな成果を実現できるという現実を実感できた。これらの気づきは、今後の研究やキャリアを形づくるうえで大きな指針となるだろう。

自己についての発見も少なくなかった。たとえば、理論を現場で実践しようとしたときに必ずしも思い通りにいかない状況に直面した際、私は「なぜこうなっているのか」「どう改善できるのか」と自ら問いを立てる傾向があることに気づいた。これは今後の人生において重要な強みとなりうる特性であると感じた。一方で、完璧さを追求しすぎて柔軟性を欠く場面もあったことは反省点であり、改善が必要だと認識している。

今後に向けては、この経験を単なる一過性の思い出として終わらせず、具体的な行動に結びつけていきたいと考えている。特に、教育支援における継続性や標準化の課題は、私が研究を志す「東アジアにおける歴史和解と平和構築」というテーマとも深く関わっている。教育は未来を支える基盤であると同時に、異なる文化や国家間の相互理解を促し、対立を緩和する強力な手段となる。私は今後、教育現場で得た知見と歴史和解の学術研究を往復させながら、学術的にも実践的にも平和構築に貢献したいと考えている。加えて、語学力の向上を図り、英語のみならずスペイン語・中国語・韓国語など多言語を習得することで、より広い地域の人々と直接関わり、国際協力に多角的な視点から携わっていくことを目指したい。

活動先の団体に対して提言したいのは、教育活動の内容を体系的に整理し、ボランティアが入れ替わっても継続性を確保できる仕組みを整備することである。例えば、教材や指導方法をマニュアル化し、過去の活動記録を共有できるデータベースを構築することは有効であろう。また、現地スタッフと外部ボランティアの役割を明確にし、互いの知識や経験を補完し合える環境を作るべきである。教育は単発的な支援では成果が薄く、積み重ねと一貫性によって初めて効果を発揮する。団体にはその重要性を改めて認識してほしいと考える。

最後に自己評価を述べる。今回の活動を通じて、私は当初掲げた目的を一定程度達成するこ

・ 学生による活動報告

とができた。特に、異文化理解や自己の特性発見といった点では大きな進展があったと評価できる。しかし、現場での課題に直面した際に十分に主体的に働きかけることができず、受け身にとどまった場面があったことは反省点である。自ら改善提案を行うなど、より積極的に行動すべきであったと痛感している。それでも、この経験は私にとって自分自身の可能性と限界を知る貴重な糧となり、今後の成長の出発点となることは間違いない。課題を成長の契機として次なる挑戦へとつなげていくことで、私はより大きな成果を実現できると確信している。

演奏ボランティア ポピンズナーサリースクール芝浦ベイ

音楽芸術学科 3 年

1．活動の目的、趣旨、活動内容

本活動は、ポピンズナーサリースクール芝浦ベイで 0 歳から 3 歳の子どもたちに生の音楽に触れる機会を提供することを目的に実施した。子どもたちが楽器の音色やリズムを体験し、音楽を身近に感じられるようにすることを趣旨としている。当日は、親しみやすい曲を選び、楽器紹介を交えながら 3 曲ほど演奏した。子どもたちは体を揺らしたり手拍子をして楽しみ、音楽の魅力を共有する時間となった。短時間だったが、子どもたちにとって音楽を好きになるきっかけとなり、演奏者にとっても学びの機会となった。

2．この活動を通してどのような社会課題に取り組もうとしましたか？

音楽活動で子どもたちの成長を支えるだけでなく、文化的格差の是非、地域のつながりの再構築といった社会的課題の解決に取り組んだ。音楽は言葉を超えて感情を伝える手段であり、自己を表現し、他者とつながるきっかけとなるからだ。家庭環境や地域によって文化や芸術に触れる機会に差がある状況の中で保育園で質の高い音楽体験を届けることを目的とした。

また、保育士や子どもたちと新たな交流が可能になり、都市部における地域の希薄化の緩和にも繫げたいとの思いから保育園で音楽活動を行った。

3．取り組み内容

取り組み内容としては、まず挨拶から始まり、ピアノソロによる「とんとんとんとん ひげじいさん」で子どもたちの緊張を和らげた。続いて「小さな世界」をバイオリンとクラリネットの二重奏で演奏し、子どもたちは自然と手拍子をしながら楽しんでいた。その後、ピアノ・バイオリン・フルート・クラリネットの楽器紹介を行い、音色や特徴を説明するだけでなく、実際に触れる体験も設けたことで、子どもたちは目を輝かせていた。さらに、フルートとバイオリンによる「ミッキーマウスマーチ」では体を揺らしてリズムにのる様子が見られ、最後はアンコールとして全員合奏の「幸せなら手をたたこう」で子どもたちも一緒に参加し、会場が一体感に包まれた。演奏会は全体で約 30 分間、音楽を身近に感じられる時間となった。

4．取り組み成果

今回、保育園で音楽活動を行い、子どもたちに楽器の音色や演奏を身近に感じてもらう機会を提供した。活動は約 30 分で、ピアノ演奏に合わせた「とんとんとんとん ひげじいさん」の手遊びから始まり、「小さな世界」ではクラリネットとバイオリンの演奏を披露し、「ミッキーマウスマーチ」ではフルートとバイオリンに合わせて子どもたちが手拍子を楽しんだ。楽器紹介や自己紹介の時間も設け、楽器のクイズを交えることで、子どもたちは楽器の名前を覚え、興味を持ってくれた様子だった。初めて触れる楽器に対して「弾いてみたい」「もっと聴きた

．学生による活動報告

い」といった声も聞かれ、音楽が自己表現や他者とのつながりのきっかけとなることを実感した。文化的・芸術的な体験の機会に差がある現状において、こうした活動がその格差の緩和に寄与するとともに、保育士との交流を通じて地域のつながりの再構築にもつながる可能性を感じた。一方で、楽器紹介の際に一人ずつ楽器に触れる時間が長く、待機中の子どもが飽きてしまう場面もあった。改善点として、紹介の合間に小さな音でクラシックを演奏したり、楽器の音に合わせて簡単な手遊びを取り入れたりすることで、集中力を保ちつつ楽しさを持続できると考える。

5．活動を行っての感想

この活動で得たことは、音楽が人と人をつなげることができ、場の空気を柔らかくする力を持っているという実感である。子どもたちの反応や保育士さんとの会話を通じて、音楽がコミュニケーションのきっかけとなり、安心感につながると改めて感じた。また、社会的な課題に対して、自分の得意分野を生かしてアプローチできることを実感した。喜びとやりがいにつながり、今後の活動への自信にもなった。今回は対象が保育園児だったため、飽きずに音楽を楽しんでもらえるよう工夫することを重視し、メンバーと話し合いながらプログラムを作成した。

視覚的にも興味を引けるように、お揃いの衣装を用意したり、子どもたちの反応を想像しながら構成を練った。

対象によってプログラムを調整することは当然だが、保育園児にとって「何が楽しいのか」「どうすれば夢中になってくれるのか」を丁寧に考えることの大切さに改めて気づかされた。曲目はもちろん、一緒に手遊びができる楽曲を選ぶなど、参加型の要素を意識して構成した。

また、小さい頃に生の楽器に触れる経験は、将来何かに繋がる可能性があると感じている。子どもたちが音楽を通じて何かを感じたり、記憶に残る体験になってくれたら嬉しい。そして今回の活動を通して、自分たちで一つのプログラムを作り上げる過程そのものに楽しさを感じることができた。準備や話し合いを重ねて形にしていく中で、仲間との協力や工夫の面白さを実感したし、当日の演奏では改めて音楽って楽しいと感じる瞬間がたくさんあった。子どもたちが音に合わせて体を動かしたり、笑顔を見せてくれたりする姿から、音楽の持つ力を改めて感じることもできた。

また、子どもたちの反応を意識しながら演奏したことで、相手に伝えるための工夫や場の空気を読む力の大切さにも気づかされた。今回の経験を通して、音楽が人に寄り添い、記憶に残る時間をつくれる可能性を実感した。これからも音楽を通じて小さな喜びや温かさを届けていきたい。

「てらこやちば」活動報告

音楽芸術学科 2 年

1．活動の目的、趣旨、活動内容

「てらこやちば」での活動は、子どもたちが安心して過ごせる居場所をつくり、年齢や学校、性別を超えて交流できる場を提供することを目的に行われた。学生として参加し、料理や工作、ゲーム、外遊びなどを通して子どもたちの自主性や主体性を育むことを目指し、一人ひとりの個性に寄り添いながらサポートした。また、勉強や生活の相談にも応じ、学校や家庭とは異なる「斜めの関係」を築くことで、子どもたちが安心して挑戦できる環境づくりに努めた。

2．この活動を通してどのような社会課題に取り組もうとしましたか？

私がこの活動を通して取り組もうとした社会課題は、子どもたちの「経験格差」や「安心して過ごせる居場所の不足」である。家庭環境や経済状況、学校の違いによって、子どもが体験できる活動や人との関わりには大きな差が生じており、それが自己肯定感や将来の選択肢に影響を与えていると感じた。実際に自分自身も、同世代が当たり前に経験している遊びや交流の機会が少なく、そのことに戸惑いや生きづらさを感じた経験がある。

「てらこやちば」は、学年や学校、背景に関係なく子どもが集い、大人でも友だちでもない「斜めの関係」の中で安心して挑戦できる居場所を提供している。このような場をつくることで、子どもたちが多様な経験を重ね、自分らしさを肯定できるようになると考えた。そのため私は、この活動を通して、子どもが孤立せず、経験や人とのつながりを得られる社会を目指し、居場所づくりという社会課題に取り組もうとした。

3．取り組み内容

私が参加した「てらこやちば」では、子どもたちが安心して過ごし、自由に挑戦できる居場所づくりを目的に、さまざまな活動に取り組んだ。具体的には、料理、ゲーム、工作、学習支援、外遊びなど、学校や家庭では経験しにくい活動を子どもたちと共に行った。

料理活動では、包丁を使って野菜を切るなど、子どもが主体的に挑戦できるよう見守りながらサポートした。最初は不安そうにしていた子どもも、成功体験を重ねることで自信を持ち、「できた」と嬉しそうに報告してくれる姿が見られた。また、学習支援では、勉強や定期テストに関する悩み相談に応じ、答えを一方的に教えるのではなく、一緒に考えながらヒントを出す関わりを心がけた。

活動全体を通して、子ども一人ひとりの性格や関心に合わせた声かけを行い、緊張している子や自分の意思を表に出しにくい子にも安心して参加してもらえるよう配慮した。子ども同士が互いに影響を受けながら挑戦する姿を大切に、「斜めの関係」の中で子どもが自分らしく過ごせる環境づくりに取り組んだ。

．学生による活動報告

4．取り組み成果

本活動を通して、当初設定した「子どもたちが安心して過ごせる居場所をつくり、経験格差を和らげる」という目的は、一定程度達成できたと考える。料理や遊び、学習支援といった活動を通じて、子どもたちが自ら挑戦し、「できた」という達成感や自信を得る姿が多く見られた。また、初めは緊張していた子どもが次第に心を開き、自分の考えや学校生活について話してくれるようになるなど、安心して過ごせる居場所として機能していたことを実感した。

一方で、すべての子どもに十分な関わりを持てたとは言いきれず、特に参加人数が多い活動では、一人ひとりに丁寧に寄り添う時間が限られてしまう場面もあった。その要因として、学生スタッフの人数や役割分担が十分に整理されていなかったことが挙げられる。しかし、限られた時間や人員の中でも、子ども同士が影響し合い、挑戦の輪が広がる場面が生まれたことは大きな成果であった。

以上のように、目的は概ね達成できたものの、体制面の工夫によって、より多くの子どもに安定した支援を届けられる余地があることも明らかになった。この気づきは、今後の活動改善や居場所づくりの質を高める上で重要な成果である。

5．活動を行っての感想

今回、「てらこやちば」での活動に参加し、子どもにとって安心して過ごせる居場所があることの重要性を、実体験を通して強く実感した。学校や家庭とは異なる空間で、大人でも友達でもない学生と関わる「斜めの関係」は、子どもたちにとって自分を過度に飾らずにいられる貴重な場であり、活動を重ねるごとに子どもたちの表情や態度が柔らいでいく様子が印象的であった。初めは緊張して言葉数が少なかった子どもが、帰る頃には自分から話しかけてくれたり、次回の活動を楽しみにしている様子を見せてくれたりしたことは、この活動が子どもたちにとって意味のある居場所になっている証だと感じた。

活動の中では、料理や遊び、学習支援など、さまざまな場面で子どもと関わったが、特に印象に残っているのは、子どもが「できた」と感じる瞬間に立ち会えたことである。包丁を使うことを怖がっていた子どもが、見守りや声かけを通して自信を持ち、嬉しそうに成果を伝えてくれた姿から、成功体験が子どもの自己肯定感に直結することを実感した。また、勉強の悩みや学校生活の不安を打ち明けてくれる場面もあり、安心して話せる相手として受け入れてもらえたことに、大きなやりがいを感じた。

一方で、子ども一人ひとりに十分に関われなかった場面や、もっと適切な声かけができたのではないかと反省することも多かった。関わり方に正解はなく、相手の様子を見ながら試行錯誤する難しさを痛感すると同時に、自分自身の未熟さや課題にも気づかされた。しかし、その反省があるからこそ、次はどう関わればよいのかを考え、成長につながれると感じている。この活動は、子どもたちのためだけでなく、自分自身にとっても大きな学びの場であった。子どもの多様性を理解し、寄り添いながら関わる姿勢の大切さを学べたことは、今後どのような進路に進むとしても活かせる経験である。今後も子どもたちと同じ目線で向き合い、一人ひとりが安心して自分らしくいられる居場所づくりに関わり続けていきたいと強く感じている。

学習支援ボランティア
湘南台小学校国際教室

国際交流学科 2 年

1．活動の目的、趣旨、活動内容

日本語が母語ではない小学生への学習支援活動

2．この活動を通してどのような社会課題に取り組もうとしましたか？

グローバル化が進む中、日本で暮らす外国籍やルーツを持つ子どもたちが急増しています。しかし、学校現場では「日常会話はできても、授業の内容が理解できない」という、いわゆる学習言語の壁が大きな課題となっています。

私がこの活動に取り組んだ理由は、言葉の壁が原因で、子どもたちが本来持っている能力を発揮できず、自信を失ってしまうことを防ぎたいと考えたからです。湘南台小学校においても、日本語が十分でないために、友だちとのコミュニケーションや教科学習に苦労している子がいます。言葉が分からないことで孤立してしまうことは、将来の進路選択を狭めるだけでなく、自己肯定感の低下にもつながります。

「すべての子どもが対等に学び、学校生活を楽しめる環境づくり」を目指し、地域社会の一員として、公教育だけでは手が届きにくい、一人ひとりに寄り添った学習支援が必要だと考え、このボランティア活動に参加しました。

3．取り組み内容

主な活動として、週に一度、授業中の個別学習の時間に、日本語支援を必要とする児童のサポートを行いました。具体的には以下の3点に注力しました。

(1) 教科書の読み合わせと語彙の補足

国語や算数の教科書に出てくる言葉の中で、生活言語(「食べる」「寝る」など)ではない、学習に必要な言葉(「合計」「比較する」など)を、イラストやジェスチャーを交えて分かりやすく説明しました。

(2) 宿題のサポートと対話の重視

宿題を一緒に進めながら、その日の学校での出来事を日本語で話す時間を設けました。正解を出すだけでなく、「自分の気持ちを日本語で伝える練習」を大切にしました。

(3) 安心できる居場所づくり

勉強だけでなく、子どもの母国の文化についても質問し、彼らが「教わる側」だけでなく「自分の文化を教える側」になれる機会を作りました。これにより、信頼関係を築き、子どもがリラックスして日本語を使える環境を整えました。

4．取り組み成果

活動の結果、一定の成果を得ることができました。当初は自信がなさそうに小声で話してい

．学生による活動報告

た児童が、今では自ら積極的に「先生、これ教えて！」と声をかけてくれるようになりました。また、担任の先生からも「授業中に手を挙げる回数が増えた」という言葉をいただき、学習に対する意欲の向上という目的は達成できたと感じています。

一方で、課題も残っています。週に数時間の支援では、複雑な漢字や抽象的な概念を完全に定着させるには時間が足りないのが現状です。これは個人の努力だけでなく、学校・家庭・地域がより密接に連携し、日常的に日本語に触れる機会を増やす仕組みが不足していることが原因だと考えられます。

完全に「言葉の壁」を取り除けたわけではありませんが、子どもが「学校は楽しい、自分もできる」という前向きな姿勢を持てるようになった点は、支援の大きな成果であったと確信しています。

5．活動を行っての感想

このボランティア活動を始める前、私は「教える側」として、一方的に知識を伝える役割だと思っていました。しかし、湘南台小学校の子どもたちと過ごす中で、私自身が彼らから教わることが非常に多く、この活動は相互の学びの場であると強く実感しています。

活動を通して得たいこと

私がこの活動を通じて得たいのは、「多文化共生社会を生きる一市民としての視点」です。ニュースで耳にする「外国人支援」という言葉はどこか遠いものに感じていましたが、目の前で一生懸命に漢字を書く子どもの姿を見ることで、それが自分たちの生活に直結する身近な課題であることを肌で感じたいと考えました。また、言葉が通じにくい相手に対して、どのように情報を整理し、相手の立場に立って伝えるかという「コミュニケーションの本質的なスキル」を磨きたいと思っています。

活動を行っての感想

実際に活動を行ってみて、最も印象的だったのは、言葉が分からなくても心を通わせようとする子どもたちの純粋なエネルギーです。日本語が不自由であっても、絵を描いたり、笑顔を見せたりすることで、彼らは必死に自分の世界を伝えようとしてくれました。その姿に触れるうち、私は「日本語を正しく教えること」以上に、「あなたのことを知りたい、大切に思っている」というメッセージを届けることの大切さに気づきました。

また、日本の学校文化に戸惑う子どもたちの姿を見て、私たちの社会がいかに「当たり前」を前提に動いているかを痛感しました。例えば、連絡帳の書き方や持ち物の準備など、日本で育った私たちが無意識に理解していることが、彼らにとっては高いハードルになることがあります。こうした小さな「気づき」を拾い上げ、一つひとつ丁寧に説明していくプロセスは、私自身の視野を大きく広げてくれました。

子どもが昨日まで分からなかった言葉を今日使えるようになった瞬間の輝くような笑顔は、何物にも代えがたい喜びです。これからも、彼らが自分らしさを失わずに日本社会で歩んでいけるよう、良き伴走者であり続けたいと思います。この活動は、私にとって単なるボランティアではなく、共に新しい社会の形を模索する、かけがえのない経験となっています。

舞岡公園での田んぼ、畑、雑木林等の農体験

音楽芸術学科 2 年

1．なぜボランティア活動を行ったか

私が舞岡公園でのボランティア活動に参加した理由は三点あります。第一に、豊かな自然に触れ、その恵みである米作りに関わりたいと考えたこと。第二に、大学が推奨する地域社会貢献制度を活用したいと思ったこと。第三に、履修単位として認定されることで、自らを律して活動に取り組めると考えたことです。これらの理由から、雑木林の保全や田んぼ活動、広報誌の折り込みといった活動に参加しました。活動を通じて横浜の緑豊かな魅力を広めるとともに、地域の方々と協力しながら自然と向き合うことで、かけがえのない経験を得ることができました。また、市民が舞岡公園に寄せる思いを知ること、地域とのつながりや自然保全の重要性を実感する貴重な機会となりました。

2．当初の自分の目的を達成したか

当初の目的は概ね達成されました。ボランティアに申し込んだ時点では自分のために始めた活動でしたが、報告書を作成する段階では「参加して本当に良かった」と強く感じています。指導員の年齢層は比較的高く、落ち着いた環境の中で活動に取り組むことができました。特に、緑豊かな雑木林の整備や田んぼ作業を通して、私が抱いていた「自然の中で楽しく活動に携わりたい」「自分を律したい」という希望は、着実に、しかも想像以上の形で実現されたと実感しています。この経験は単なる課外活動にとどまらず、大学の講義として誇れるほど意義深いものであり、学びと成長をもたらす貴重な機会となりました。

3．活動において発見したことは何か

活動を通じて、雑木林の整備や田んぼでの荒起こし、水路や農具の整備・保管、草取りといった地道な作業が、健全な施設維持に不可欠であることを改めて認識しました。縄を絞る作業や機械のメンテナンスも、日頃から丁寧に使用しているからこそ可能であると実感しました。また、参加者との交流を通じて多くの学びを得ることができました。無農薬で重機を使わず、鍬で田を起こす作業は予想以上に重労働であり、その経験から米を一層大切に思うようになりました。さらに、子どもや保護者が参加することで、米が多くの知恵や経験、人の力の積み重ねによって美味しく安全に、そして継続的に食べられることを学ぶ機会にもなると感じました。毎年こうした活動が継続できるのは、「特定非営利活動法人 舞岡やとひと未来」の組織力や定期的な勉強会、明瞭な収支報告、地域住民や横浜市との良好な連携によるものであり、その取り組みの素晴らしさを実感しました。一方で、次世代への伝承や指導者の高齢化といった課題も存在し、理想だけでは語れない現実にも気づかされました。

．学生による活動報告

4．この体験を通して何を得たか

積極的に活動に参加し、危険な作業も多く、チームで行動するなど一つ一つの作業に自己責任とチームの約束事など真剣に向き合った経験は、自身の成長にも繋がり、誇りと自信がついたと感じています。自然の中で体を動かす心地よさや、達成感を味わうことができました。そこに住んでいる動植物がとても愛おしく思える様になり、季節をより敏感に感じられる様になりました。また、色々な作業を組織立って協力することで、より大きな成果が得られることを学びました。また、組織的に協力することで、より大きな成果が得られることも学びました。里山の現状を維持するためには、厳しい制限が必要不可欠であることも知りました。例えば、里山で収穫された物のみを使い、油分や洗剤の使用を禁止するといった取り決めです。もちろん、ゴミは持ち帰る、ペットの散歩可能範囲を厳守するといったルールも徹底されています。

ただし、作業する中で夏の気温はかなり人体に危険で、今後は機械化や夏の作業時間の見直しもされるかもしれません。そういった取り決めを次の世代がどう繋いでいくか、が課題だと思います。これはどの分野においても生じている問題だと思いました。しかし、そういった問題も、指導員やボランティアのコミュニケーションがしっかりしていれば、問題は少しずつ解決できると学びました。

5．自己について発見できたか

土に触れ、苗を植え、汗を流し、実りの秋を迎える一連の体験は、自然の恵みの尊さを肌で感じる貴重な機会となりました。同時に、この美しい田園風景が、長年にわたり地域の人々によって維持・管理されてきたものであり、その景観を保全し、次世代へと継承していくことの重要性を改めて強く認識するに至りました。気候変動や耕作放棄地の増加といった課題に直面する現代において、持続可能な農業のあり方や、地域社会と連携した自然環境の保全活動の必要性を痛感しました。自然環境とは言葉では簡単ですが、一旦崩れた自然を元に戻す事は、自然が出来上がった年月必要となります。特に今年は水不足や夏の気温など、作物の収穫に影響し、それは価格変動の原因となる事も実感しました。今後は野菜やお米の値段を値段だけで判断しないよう気を付け、生産者に感謝できる様になったと思います。

6．この体験をふまえ今後何を行いたい

今回の緑豊かな田んぼでのボランティア活動を通して、私は単に自然に触れただけでなく、豊かな実りをもたらすお米の大切さを改めて実感することができました。今回の体験を活かし、今後も地域の自然保護活動に無理のない範囲で参加していきたいと考えています。また、家族や友人にも活動の意義を楽しく伝えてみたいです。大学卒業後も地域の緑化活動や、農業ボランティアなど積極的に参加し、農産物やお米作りによって、日本の気候や風土、文化も生涯学び、地域貢献したいと思います。

7．参加したボランティア活動（又は団体）に関しての提言

春は苗植えで、小さな命を土に託す感動を子どもたちに体感させ、夏は草取りで太陽の下、他大学では講義内実習として参加され、交流や意見交換なども含めた汗を流す達成感、秋には

． 学生による活動報告

黄金色の稲穂が実り、収穫の喜びを分かち合います。

普段、土に触れる機会がない大学生にとって、田んぼはきっと新しい発見があり、泥んこになりながら、生き物と触れ合ったり、美味しいお米がどうやってできるのかを肌で感じたり...教科書だけでは学べない、貴重な経験ができる事をアピールできると良いと思いました。

中途半端な SDGs ではないので、社会人になった時に意識も深まりやすいと思います。特に大学生へのボランティア募集に力を入れていた様にも思いましたが、小中学生や高校生にも積極的に授業や校外学習などという形で参加できれば良いと思いました。子どもたちが継続的にボランティアに参加できる環境も重要だと思いました。指導員たちはかなりの知識量なので、学校の先生の負担軽減にもなると考えました。

8．自己評価

本ボランティア活動は、当初の目標をほぼ達成したと評価します。活動開始当初は、怪我の防止や他者への配慮を最優先していましたが、指導員の皆様の温かいご指導とユーモア溢れる雰囲気を支えられ、円滑なコミュニケーションを築くことができました。結果として、活動に積極的に参加することができ、自発的な行動へと繋がりました。特に、田んぼでの作業を通じて土に触れ、作物の成長を見守る過程で、各作業に真摯に向き合うことの重要性を学び、大きな達成感を得ることができました。この経験は、自然の恵みと食の尊さを再認識させ、私自身の成長に深く寄与したと感じています。今後も、今回の貴重な経験を活かし、自然への感謝と地域社会との繋がりを大切にしながら、より豊かな感性を育んでいきたいと考えます。

高齢者向けスマホボランティア

音楽芸術学科 2 年

1．なぜボランティア活動を行ったか

直接高齢者と触れ合う中で悩みやニーズを理解し、今後の活動に役立てたいという思いから参加しました。大学でボランティア活動が単位認定される背景には、社会との接点や人手不足があると感じています。不安ながらも未来性を持つ学生として、その責任と可能性に惹かれ参加を決意しました。徒歩圏内である新橋地域ケアセンターの高齢者向けスマホ教室を選んだのは、地域の方とフェリス女学生が交流する機会の一端となれればと考えたからです。現代においてスマホは不可欠ですが、操作に不安を感じる高齢者は少なくありません。情報格差は社会参加や生活の質を低下させます。自身の知識を活かし、高齢者のデジタルライフを支援したいと考えました。知識を伝えるだけでなく、不安に寄り添い、自信を持ってスマホを使えるようサポートしたいと思いました。

2．当初の自分の目的を達成したか

当初の目的である、高齢者個人のスマホの悩み解決、おしゃべりによる日常の問題点の洗い出しと地域ケアセンターへの情報提供は達成できました。スマホの使い方は多岐にわたり、機種も用途も様々でした。このボランティアでは、高齢者の方の基本操作習得と、スマホへの苦手意識軽減を目指しました。数回の活動を通して、操作に慣れ笑顔で感謝される場面に多く立ち会えました。戸惑っていた方が自主的にアプリを操作したり、家族とビデオ通話を楽しんだりする様子を見て、目的達成を感じています。個別の質問に丁寧に答えること、些細な疑問にも真摯に向き合うことで信頼関係を築けたことも大きかったです。全ての方が使いこなせるようになったわけではありませんが、抵抗感が薄れ前向きな気持ちを持てただけたとすれば、私の目的は十分に達成されたと思います。

3．活動において発見したことは何か

スマホ教室は技術指導だけでなく、高齢者の交流と社会との繋がりを保つ重要な機会であると気づきました。何気ない日々の出来事や趣味の話をする様子は心温まるもので、デジタル支援が高齢者の孤立を防ぐ一助となっていることを実感でき、大きな喜びでした。スマホ教室後のボランティア同士の話し合いで問題点や気づきを共有し、次回の改善に繋がっています。これは地域への責任であり、今後の活動に活かされることを誇らしく思います。会話の中で、スマホの質問以外に家族関係や日常の問題点も垣間見え、不必要な機能やスマホ決済一辺倒が本当に幸せなのか考えることもありました。活動を通して、高齢者のスマホへの疑問や不安は多岐にわたり、操作だけでなくセキュリティや心理的な抵抗感も根強いと気づきました。デジタルスキルの個人差も大きく、柔軟な対応が不可欠だと痛感しました。

．学生による活動報告

4．この体験を通して何を得たか

このボランティア体験を通して、技術や教え方だけでなく、人間的な成長という財産を得ました。人に教える難しさと喜びを深く理解し、相手の立場に立った説明の重要性を学びました。質問に答えられないもどかしさから、コミュニケーション能力の向上を強く意識するようになりました。高齢者の方々との触れ合いを通して、忍耐力や傾聴力も養われました。ゆっくり話す方や同じ質問を繰り返す方に丁寧に耳を傾け、多様な価値観に触れ視野が広がりました。人の役に立てた実感は大きな達成感と自己肯定感を与えてくれました。感謝の言葉や笑顔を見るたびに、参加して良かったと心から感じました。

5．自己について発見できたか

困っている人を助けたいという気持ちも強く再認識しました。操作に苦労する方を見ると力になりたいと強く感じ、感謝されることで人の役に立つ喜びを深く味わいました。限られた時間で効率的に伝えるためには、事前の準備が不可欠です。説明の順番や資料の工夫など、常に考えながら活動する中で、自然と段取り力が身につきました。この経験を通して、人をサポートし、人の役に立つことに喜びを感じる自分の性質を改めて認識しました。ボランティア活動で高齢者の方々と積極的に関わるうち、最初は緊張しましたが、笑顔や理解してくれる様子に自信を持って接することができました。

6．この体験をふまえ今後何を行いたい

地域に根差したボランティア活動は、フェリス女学院大学にとって非常に重要だと私も感じます。学生がボランティア活動履修を通して地域に積極的に関わることは、地域住民との積極的な交流を促し、近隣住民の大学に対する見方も変わるかもしれません。少子化が進む現代において、大学と地域の連携はますます重要になると考えます。地域密着型のボランティアは、大学が地域社会に貢献する姿勢を示す良い機会となり、双方にとってプラスになるはずです。伝統ある大学が地域との繋がりを深めることで、より魅力的な存在になる可能性を秘めていると思います。

また、今回の活動を通して、高齢者の方々が抱える課題はデジタルスキルだけではないことも痛感しました。健康問題、毎日の何気ない生活、様々な困難に直面されている方も少なくありません。今後は、スマホ支援だけでなく、より包括的な視点から高齢者の方々をサポートできるような活動にも関心を持ち、積極的に情報収集を行っていきたいと考えています。

7．参加したボランティア活動（又は団体）に関しての提言

提言する程私に知識や経験はありませんが、参加して思った事をあえて以下 2 点提言します。

（１）ボランティア募集の周知方法についてです。現在は主に地域のお知らせや口コミでの募集が中心ですが、インターネットや SNS などを活用することで、より多くのボランティア希望者を集めることができるのではないのでしょうか。現在、大学生ボランティア中心にスマホ教

．学生による活動報告

室のホームページを作成しています。特に、若い世代の参加を促すためには、大学のボランティアセンターとの連携や、学生向けの広報活動を強化することが有効だと考えられます。

(2)活動の効果測定についてです。参加者のアンケート調査などを定期的の実施していますが、活動の成果や改善点などを客観的に把握することで、より効果的な活動へと発展させていくことができるのではないのでしょうか。

今回参加させていただいた高齢者向けスマホボランティア活動は、高齢者の方々のデジタルスキル向上に大きく貢献し「参加してよかった」と前向きになれる、その意義は非常に大きいと感じています。

8．自己評価

高齢者向けスマホボランティア活動を通して、私は積極的に活動に取り組み、当初の目的を概ね達成することができたと考えています。高齢者の方々の疑問や不安に寄り添い、根気強く説明することで、多くの方のスマホに対する苦手意識を軽減し、基本的な操作スキルを習得していただくことができたと感じています。特に、参加者の方々が笑顔で「ありがとう」と言ってくださった時や、以前はできなかった操作ができるようになったと報告してくださった時には、大きな喜びを感じ、この活動に参加して本当に良かったと改めて思いました。積極的に質問に対応したり、個々の理解度に合わせて説明方法を工夫したりするなど、自分なりに工夫しながら活動に取り組めた点も評価できると思います。

一方、反省点としては、全ての方に対して十分なサポートを提供できたとは言い切れない点があります。限られた時間の中で、参加者のペースに合わせた丁寧な指導を心がけましたが十分な知識や説明力が不足していると感じる場面もありました。

総合的に今回のボランティア活動は、私にとって貴重な学びと成長の機会となりました。今後もこの経験を活かし、社会に貢献できる活動に積極的に参加していきたいと考えています。

よこはま教育実践ボランティア

英語英米文学科 2 年

私は約半年間にわたって、よこはま教育実践ボランティアとして活動した。本活動は、教員を目指す学生などが学校現場に入り、教育支援を行いながら実践的な経験を積むことを目的とした制度である。私は横浜市立川井小学校にて活動し、現在は特別支援教育支援員として同校で活動を継続している。大学で得た知識を実際の現場で活かすことができ、非常に有意義な経験となった。以下、本活動を通して学んだことや感じたことについて報告する。

1. なぜボランティア活動を行ったか

私が本活動に参加した理由は、教職課程を履修しており、将来は中学校・高等学校の英語科教員になりたいと考えているからである。大学では教職に関する科目を学んでいるが、講義で得られる知識だけでは学校現場の実際を十分に理解することは難しいと感じていた。そこで、子どもたちと直接関わりながら、学校という場所で教員として働くことについて、身をもって体験したいと考えた。申し込み当時は中学校での募集が少なく、小学校での活動が中心であった。しかし学校の種類が異なっても、現場で子どもと関わる経験は将来必ず役立つと考えた。また、自分の母校であれば、学校の雰囲気も十分理解しており、安心して活動を始められると思った。そのため、母校である小学校で活動することを決めた。

2. 当初の自分の目的を達成したか

当初の目的は、学校現場の雰囲気を知ること、子どもたちと関わることであり、そして教員という職業への理解を深めることであった。これらの目的は十分に達成できたと感じる。実際に活動してみると、教員の仕事は授業を行うことだけではなく、授業準備、教材研究、児童への声かけ、保護者対応、校内での情報共有など、多岐にわたっていることが分かった。また、児童一人ひとりの様子を把握しながら学級全体をまとめることは容易ではなく、高い責任感と継続的な努力が必要であると感じた。さらに、子どもたちと関わる中で、教えることの楽しさや、成長を支えるやりがいも実感することができた。活動前よりも教員という仕事を現実的に理解できたため、当初の目的は達成できたといえる。

3. 活動において発見したことは何か

活動を通して最も強く感じたことは、担任教員の存在の大きさである。担任の先生が教室にいただけで児童が落ち着き、指示にもすぐに従う様子を見て、日頃から積み重ねられてきた信頼関係の大切さを実感した。また、担任の先生が休みの日には不安そうな表情を見せる児童もあり、児童にとって担任が精神的な支えとなっていることも分かった。また、児童との信頼関係を築くことは簡単ではないことも発見した。特に高学年の児童とは距離感が難しく、ただ指示を出したりするだけでは心を開いてもらえないと感じた。そこで、教員の立場を強調しすぎ

．学生による活動報告

ず、相談しやすい先輩のような存在になることを意識した。その結果、似顔絵を描いて渡してくれたり、廊下で会った際に駆け寄ってきて話しかけてくれたりするようになった。この経験から、信頼関係は日々の小さな関わりの積み重ねによって築かれることを学んだ。さらに、個別級での活動では、児童同士のトラブルや感情の乱れへの対応は想像以上に難しいと知った。言葉で気持ちを表現することが難しい児童もあり、行動の背景を考えながら関わる必要があった。表面的な行動だけで判断せず、その児童が何に困っているのかを考える姿勢が重要であると学んだ。

4. この体験を通して何を得たか

この体験を通して、コミュニケーション力、観察力、柔軟な対応力を得ることができた。児童によって性格や理解の仕方、得意不得意は異なるため、一人ひとりに合わせた声かけや支援が必要であった。そのため、相手の様子を見ながら対応を変える力が身についたと感じる。また、授業中には児童から質問を受けることが多く、分かりやすく説明する力が必要であった。特に算数の授業では、自分自身が苦手意識を持っていた教科であったため不安もあった。しかし、児童から「先生の説明分かりやすい」と言ってもらえた経験は大きな自信になった。自分が苦手であった内容でも、相手に合わせて説明を工夫することで伝えることができると学んだ。

5. 自己について発見できたか

本活動を通して、自分は学校という場所が好きであることを改めて認識した。以前から教員を目指してはいたが、本当に自分に務まるのか、この進路選択でよいのか不安になることもあった。しかし、約半年間活動が続ける中で、学校で過ごす時間そのものにやりがいを感じ、子どもたちと関わることに楽しさを見いだしている自分に気づいた。また、自分は教えることが思っていた以上に好きであり、相手に伝えることにもやりがいを感じる人間であると分かった。算数のように自分が得意ではない教科でも、児童が理解できるように言葉を選びながら説明することができた。この経験から、自分の可能性を狭く考えすぎていたと思った。

6. この体験をふまえ今後何を行いたい

今後は、教員を目指す気持ちをさらに強く持ち、大学での教職課程により一層真剣に取り組んでいきたい。教育に関する理論的な学びと、現場での経験を結びつけながら、自分に不足している知識や技能を高めていきたいと考えている。また、小学校での活動は現在、特別支援教育支援員という形に変わって継続している。今後も可能な限り学校現場での活動を続け、児童理解や支援方法について実践的に学びたい。特に、さまざまな特性を持つ児童への支援方法について理解を深めたいと考えている。将来は、教科指導だけでなく、子どもの気持ちにも寄り添える教員になりたい。そのためにも、今後も学びと実践の両方を大切にしていきたい。

7. 参加したボランティア活動（又は団体）に関しての提言

本活動は、教員を目指す学生にとって非常に貴重な学びの機会であると感じた。実際の学校

．学生による活動報告

現場に入り、授業や児童対応を経験できることは、大学の講義だけでは得られない価値がある。私が活動した学校では、面接の段階から校長・副校長が温かく迎え入れてくださり、安心して参加することができた。また、活動日の朝には一日の行程表を作成して渡してくださり、見通しを持って行動することができた。各担任の先生方からも具体的な指示があり、活動しやすい環境であった。さらに、職員室や校内でも多くの先生方が気さくに声をかけてくださり、温かい雰囲気の中で活動できた。

8. 自己評価

私は約半年間、責任感を持って継続的に活動に参加した。また、児童や教職員の方々と誠実に関わることができたと感じる。はじめは緊張もあったが、回数を重ねていく中で児童との関係を築くこともできた。一方で、経験不足から戸惑う場面や、より適切な支援方法を考えられなかった場面もあった。特に個別級での対応では、自分の知識や判断力の不足を感じることがあった。今後は今回の経験を生かし、より主体的に動ける力と専門的な知識を身につけていきたい。総合的には、自分の進路を再確認し、成長につながる非常に有意義な活動であったと思う。

・ボランティアセンター資料

○ボランティアセンター規程

2003年1月23日制定

2007年1月25日改正

2015年3月12日改正

2007年5月17日改正

2016年3月24日改正

（設置）

第1条 フェリス女学院大学学則（1965年4月1日制定）第42条の2の規定に基づき、フェリス女学院大学（以下「本学」という。）にボランティアセンター（以下「センター」という。）を置く。

（趣旨）

第2条 この規程は、センターの組織運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第3条 センターは、本学の教育理念である“For Others”の精神のもと、次に掲げるボランティア活動に係る諸事業の推進に当たることを目的とする。

(1) 学生のボランティア活動に係る情報の収集・提供、参加機会の紹介に関する事項

(2) 学生のボランティア活動事業の企画・立案に関する事項

(3) 学内のボランティア団体への支援に関する事項

(4) その他学生等のボランティア活動の支援・促進に必要な業務に関する事項

（センターの施設）

第4条 センターは、緑園キャンパスに置く。

（センターの構成）

第5条 センターには、センター長、ボランティアコーディネーター(以下「コーディネーター」という)、センター職員及び学生スタッフを置く。

（センター長）

第6条 センター長は、センターを代表し、その運営等を統括する。

2 センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 センター長は、第10条に規定する委員会及び大学評議会の議を経て、学長が任命する。

（コーディネーター）

第7条 コーディネーターは、センター長を補佐し、センター業務を行う。

2 コーディネーターは、事務嘱託1名とし、ボランティア活動に経験と見識を有する者をもって充てる。

3 コーディネーターは、第10条に規定する委員会及び大学評議会の議を経て、学長が任命する。

（センター職員）

第8条 センター職員は、センター長及びコーディネーターの指示のもと、センター業務を行う。

2 センターは、必要により臨時職員を、センター職員として置くことができる。

（学生スタッフ）

第9条 センターは、センター業務の運営に当たり、学生の参加と協力を求めることができる。

・ボランティアセンター資料

- 2 学生スタッフは若干名とし、公募に応募した本学学生の中からセンター長が委嘱する。
- 3 学生スタッフの活動期間は原則1年とし、再任を妨げない。

(委員会)

第10条 センターの運営に関する諸事項を審議するため、ボランティアセンター運営委員会(以下「委員会」という。)を置く。

- 2 委員会に関する事項は、別に定める。

(その他の事項)

第11条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、別に定める。

(庶務)

第12条 センターに関わる事務は、コーディネーター及びセンター職員が行う。

(規程の改廃)

第13条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会の承認を得て行うものとする。

附 則

この規程は、2003年3月1日から施行する。

附 則

この規程は、2007年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2007年5月17日から施行し、2007年4月1日から適用する。

附 則

- 1 この規程は、2015年4月1日から施行する。
- 2 改正前の第4条関係委員会に関する事項は、ボランティアセンター運営委員会規程で別に定める。

附 則

この規程は、2016年4月1日から施行する。

○ ボランティアセンター運営委員会規程

2015 年 3 月 11 日制定

2017 年 3 月 10 日改正

2024 年 12 月 2 日改正

（趣旨）

第 1 条 この規程は、ボランティアセンター規程（2003 年 1 月 23 日制定）第 10 条の規定に基づき、ボランティアセンター運営委員会（以下「委員会」という）の構成、運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

（委員会の構成）

第 2 条 委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

- (1) ボランティアセンター長（以下「センター長」という。）
- (2) グローバル教養学部から選出された教員 3 名
- (3) 教務部長
- (4) 学生部長
- (5) 国際部長
- (6) 宗教主事
- (7) 大学事務部長
- (8) その他委員会が必要と認めた者

2 委員の任期は、前項第 1 号及び第 3 号から第 7 条までに掲げる委員についてはその職に在任する期間、同項第 2 号に掲げる委員については 2 年、第 8 号に掲げる委員については 1 年とし、再任を妨げない。

（審議事項）

第 3 条 委員会は、ボランティアセンター（以下「センター」という。）の運営に関し、次に掲げる事項を審議するものとする。

- (1) センターの運営方針に関する事項
- (2) センターの事業計画及び管理運営に関する事項
- (3) センターの日常業務の指針に関する事項
- (4) その他学生等のボランティア活動の支援・促進に関する重要事項及び必要と認められる事項

（運営）

第 4 条 委員会に委員長を置き、センター長がこれに当たる。

2 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

3 委員会は、定例委員会及び臨時委員会とし、定例委員会は原則として毎年度 1 回開催するほか、臨時委員会は、必要あると認めたときに随時招集する。

4 委員会は、その構成員の過半数の出席をもって成立する。

（議決の方法）

・ボランティアセンター資料

第5条 委員会の議決は出席者の過半数をもって決定し、可否同数のときは議長がこれを決する。

(記録)

第6条 委員会の議事については、議事録を作成し、センターがこれを保管する。

(報告)

第7条 委員長は、委員会の協議の結果を学長及び大学評議会に報告するものとする。

(その他の事項)

第8条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が決定する。

(庶務)

第9条 委員会に関わる事務は、ボランティアコーディネーターが行う。

(規程の改廃)

第10条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会の承認を得て行うものとする。

附 則

この規程は、2015年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2017年4月1日から施行する。

【運営方針 ～大学の理念とボランティアセンター～】

“For Others”の精神のもとで「自立した女性」を育成することは、フェリスの教育目標の一つです。しかしそのためには、授業を受けて試験やレポートでよい点をとるだけでは足りません。むしろ学生たちが、自分から社会に出て行って問題を発見し、その解決のための理念と計画を立て、他の人々と協力しながら行動してゆく能力を養う必要があります。ボランティアセンターは、こうした視点に立って、これまでは学生個人の自主性に委ねられてきたボランティア活動を、大学として積極的にサポートすることを目標としています。これと連動して、2003 年度から「ボランティア活動1, 2, 3」が単位化されました。

1．センターは、ボランティア活動を通して、学生と大学、社会（国内と国外）をつなぐ役割を目指します。

2．センターは、学生が希望する活動領域で、信頼できる活動場所を紹介できるよう、コーディネーターの指導のもとで情報の収集と調査を行います。さらにボランティアに関連する領域を扱う教員、地域の社会福祉協議会や他大学のボランティアセンターとの交流を積極的に進め、ネットワーク化を促進します。

3．センターは、センターを訪ねる学生たちの自主性を重視し、活動場所とのマッチングに配慮します。また大学と学生が、“For Others”の精神のもとで目的を共有する対等な人間であることを自覚し、学生たちと対話し、問合せや相談に対応します。またモニタリングを行うことで活動中の学生たちを支援し、活動状況を知ることと並んで、活動先で得られた貴重な経験の共有化に努めます。活動が終了した後は、学生自身による自己評価を促し、場合によっては成果を社会に還元するための活動を行います。

4．センターは、学生参画型の運営を目指します。とくに学生スタッフの募集と育成に努めます。学生の企画立案によるボランティア事業を支援するために、情報と場所を提供します。

5．センターは、学内のボランティア団体を支援します。各団体の目的と活動趣旨を理解し、ニーズを知るために話合いの場を設け、可能な支援について検討します。

6．センターは、写真展・講演会・ワークショップなどの催しと並んで、Newsletter の発行、ホームページの作成などによる広報活動を積極的に行います。

センターは、以上のような活動を通して、学生たちが、自分を含む人間や自然の「根源的な尊厳」に対する感性を養い、現代社会の抱える諸問題について「実践的な知性」を育み、そして社会における「市民参画型」の合意形成を促進するためのコミュニケーション能力を身につけてくれることを、場合によっては卒業後の進路につなげてゆくことを、また大学が、社会的な貢献度と知名度を高めてゆくことを目指します。

（2003年4月確定）

2025 年度を振り返って

コーディネーター 上條直美

はじめに、この一年間、学生を温かく受け入れてくださった NPO・NGO、市民団体をはじめとする受け入れ組織の皆様に心より感謝申し上げます。ボランティアセンターの役割は、学生と社会のニーズを繋ぐことにありますが、これは活動の場を提供してくださる皆様の支えがあってこそ成り立つものです。今年度は例年以上に多くの募集情報が寄せられ、若者の力を必要とする社会の関心の高まりを肌で感じる年となりました。

2025 年度を概観すると、センターの利用状況に大きな変化が見られました。延べ利用者数は 2024 年度の約 213 名（＊）から、今年度は 600 名を超え、利用率のアップが見られます。その背景には、新規事業である「ボランティアサークル制度」のスタートや「就労支援事業所ボランティア」の開始があります。特に本学初の試みであるボランティアサークルでは、学生グループが主体的に手を挙げ、活発な活動を展開してくれました。センターでは、ボランティアの本質である「主体性」が育まれるよう側面支援に徹していますが、こうした場がさらに広がっていくことを願っています。

次年度は、新たに「One-Day ボランティア」（1 日ボランティア体験プログラム）を始動させ、プログラム開発機能のさらなる充実をはかっていきたいと思います。

学外からのボランティア募集増加についても、関心のある学生へ確実に情報が届くよう工夫をしております。本学ではボランティア情報を掲示板だけではなく積極的に関心の高い学生へメール形式で届けています。学内広報などまだ十分にいきわたっていないところもありますが、教職員の皆様をはじめ学内外の協力者の皆様の協力を得て、歩みを進めてまいります。引き続き、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

＊2024 年度は途中から統計の取り方が変わり、前期が実人数で後期が延べ人数です。一人が何回も来訪することが増えたため、変更しました。

2025 年度 フェリス女学院大学 ボランティアセンター年間活動報告書

発 行 2026 年 9 月 1 日

発行・編集 フェリス女学院大学 ボランティアセンター

〒245 - 8650 横浜市泉区緑園 4-5-3 緑園キャンパス CLA 棟 2F

TEL:045-812-8462 FAX:045-812-8467 e-mail:volunt@ferris.ac.jp

<https://www.ferris.ac.jp/life/volunteer-center/news/>

本報告書の一部または全部を無断で複製、転載、販売することを禁じます。



フェリス女学院大学ボランティアセンター

